2025年05月07日

研究分野	研究内容のキーワード
代謝生化学	ビタミン、生合成、酵素、発現調節、トランスポーター
学位	最終学歷
医学博士、薬学士	岐阜市立岐阜薬科大学製造薬学科 卒業

	教育上の能力に関する事項	
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 前年度ビデオ動画の有効利用	2021年4月~現在	6年生国試対策の授業において時間の都合で詳しく説明出来なかった分野(遺伝子操作)について、前年度2年生科目「分子生物学」のアーカイブを再編集して、5つのテーマについてそれぞれ10分の動画をGoogle Classroomにアップロードして視聴を促した(総合演習Ⅱ)。
2. ビデオ動画、Z00Mによる質問対応と演習問題の解説	2020年4月~現在	「総合便音Ⅱ」。 講義がオンデマンド形式になったため、受講者全員で 共有したい質問や正答率の低い演習問題の解説をビデ オ収録して、Google Classroomに掲載した(分子生物 学、代謝生化学)。また、希望者にはZOOMで質問対応 した。
3.Google Classroomの活用	2017年4月~現在	講義で用いたスライドのハンドアウト、演習問題及び その解答等をGoogle Classroomに掲載し、学生の自学 学習を促している(分子生物学、代謝生化学、病原微 生物学、応用生化学Ⅱ)。
4. 定期試験の解説講義	2016年9月~現在	薬学科2年生科目「分子生物学」および「病原微生物学」 定期試験の解説講義を実施している。
5. 質問アンケートの実施	2014年9月~現在	受講者が40人程度の講義において、7回目と14回目の 授業でアンケートを実施し、理解が不十分と思われる 点や疑問点など質問を各自2つずつ書かせ、次回の授 業でそれぞれについて解説した。
6. μ Camの活用	2014年9月~2017年3月	講義で用いたスライドのハンドアウト、演習問題及び その解答、定期試験の解答等をμCamに掲載し、学生の 自学学習を促している。
7.LS-EDIが公開している動画の利用	2014年4月~現在	LS-EDI (Life Science Educational Digital Image Repository) が公開している動画ファイル (swf形式) をダウンロードし、web作成ソフトでブラウザに組み込み自分のパソコンで視聴できるように加工し、授業で解説した。
8. 少人数グループを対象とした補講	2011年4月~2013年10月	定期試験等で質問が殺到する場合、少人数によるグループを作らせ放課後に補助講義を実施した。
9. インターネットの活用	2010年4月~2014年8月	講義でスライドを用いたときのハンドアウト、演習問題の解答、定期試験の解答を研究室ホームページに掲載し、学生の自学学習を促している。
10. 講義中の演習問題活用	1999年4月~現在	講義内容の理解度を深めるため講義毎に演習問題を課し、解答を提出させている。この演習問題は学生が互いに相談して解答することを認めているが、学生の講義に対する取り組みを推し量ることにも役立っている。
2 作成した教科書、教材		
 「分子遺伝学」テキスト 「微生物学実習」テキスト 	2024年9月~現在 2017年9月~現在	全76ページ。単著。講義で使用するPowerPointのハンドアウトを加工して、講義ノートとしてまとめた。新カリキュラムに伴い、旧カリ科目「子生物学」のテキストを大幅に改訂した。全40ページ。共著。実習科目「人と環境への影響と細葉などによりなどにはないで記載し
3.「分子生物学」テキスト	2016年4月~2023年	菌を調べる」の微生物学領域実施項目について記載した。 全78ページ。単著。講義で使用するPowerPointのハン ドアウトを加工して、講義ノートとしてまとめた。
4.「生命情報を担う遺伝子」テキスト	2015年4月	全74ページ。単著。講義で使用するPowerPointのハン

4.7	教育工の能力に関する事	
事項	年月日	概要
2 作成した教科書、教材		
		ドアウトを加工して、講義ノートとしてまとめた。
5.「生命物理化学」テキスト	2011年~2014年	全76ページ(2013年)。単著。熱力学、生体エネルギー
		論、反応速度論について記し、演習問題も含んでい
		\$ ₀
6.「基礎生命化学」テキスト	2011年~2014年	全152ページ(2013年)、教室員2名で執筆。基礎化学、
	2011 2011	無機化学および有機化学について記し、演習問題も含
- F / (A S/) W / (-TT		んでいる。
7.「自然科学実習」テキスト	2010年~2014年	教養理系教員による実習で担当した「分別蒸留」「ア
		スピリンの加水分解反応」「酵母による発酵」につい
		て記した。
8.「細胞生物学」テキスト	2010年~2012年	担当した「細胞膜」、「細胞外マトリックス」、「生
		体エネルギー」について記した。
9.「化学実習」テキスト	1998年~2009年	教養化学実習テキスト、全約80ページ、教室員3名で執
		筆。
10 「コメディカルの生化学」度川書店	1006 5	**。 川嵜?祐監修、石原英子編集。医療関連の大学生(特に
10.「コメディカルの生化学」廣川書店	1996年	
		看護学生)と対象とした講義テキストを分担(ビタミ
		ン、ホルモンの項)執筆した。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
1. 高大連携事業	2025年2月6日	武庫川女子大学附属高校2年生対象 内容:学科紹介お
		よび講義「ウイルス学入門」
2. 中学校連携講座	2025年2月1日	仁川学院中学校大学連携講座 実験内容「ヨーグルト
2. 中于仅是15两座	2023年2月1日	
o Halle a a Company A		を使って微生物の発酵を体感しよう!」
3. 高校での分野別説明会	2024年年度	兵庫県立柏原高校(6月20日)、兵庫県立伊丹北高校
		(12月11日)
4. 高校での模擬授業	2024年年度	星稜高校(5月25日)テーマ:ウイルスと生物のあいだ
5. 西宮市大学共通単位講座	2023年10月25日	後期科目「のぞいてみたい薬学の世界」の代表及び講
		義「腸内細菌がもたらす健康へのインパクト」
6. 高大連携事業	2023年度	武庫川女子大学附属高校2年生対象のオンデマンド授業
0. 同八足仍事未	2020年/支	内容:進路アンケート内容のフィードバックおよび
		講義「ウイルス学入門」
7. 高校での模擬授業	2023年度	兵庫県立高砂南高校(7月12日)、奈良県立大学附属高
		校(10月2日)、京都共栄学園高校(11月10日)テーマ
		: ウイルスと生物のあいだ
8. 高校での分野別説明会	2023年度	兵庫県立柏原高校(6月22日)、兵庫県立伊丹北高校
		(12月14日)
9. 高大連携事業	2022年度	武庫川女子大学附属高校2年生対象のオンデマンド授業
J. 同八座]为书未	2022 + 19	
		内容:進路アンケート内容のフィードバックおよび
		講義「ウイルス学入門」
10. 高校での模擬授業	2022年度	神戸野田高校(10月29日)テーマ:ウイルスと生物の
		あいだ
11. 高校での分野別説明会	2022年度	兵庫県立柏原高校(6月16日)、大阪府立泉北高校(7
		月8日)、福知山成美高校(2月28日)
12. 薬学系CBT問題作成	2016年および2021年	薬学教育モデルコアカリキュラムの「生命情報を担う
13. 木丁水四川四四十八	2010-4-03 & 0 2021-4-	21.4 27.14 27.17 27.17 27.17
10 E W- COMPRES # . D.	0000 1000	遺伝子」より出題。
13. 医学系CBT問題作成	2002年および2012年	医学教育モデルコアカリキュラムの「生命現象の物質
		的基盤」、「生体物質の代謝」より出題。
	職務上の実績に関する事	耳項
事項	年月日	概要
1 資格、免許	1/4 日	F/A-2
1.大学設置・学校法人審議会の教員組織審査	2002年8月	京都府立医科大学大学院医学研究科統合医科学専攻博
・ハナ以但 ナバムハ 自俄 エツ 教 貝	2002十0月	
		士課程専任助教授「ゲノム医科学講義A」「ゲノム医
		科学講義B」「ゲノム医科学演習」「ゲノム医科学特
		講」D○合の資格有りと判定。
2. 薬剤師免許	1980年6月	
2 特許等	·	
1. SARS3CLプロテアーゼの組換えタンパク質	2009年	特開2009-072183 (出願人:チッソ株式会社) 赤路健
	· ·	一、野坂和人、今野博行
		、 お が 用ハ、 / お (171)

教育上の能力に関する事項

職務上の実績に関する事項						
事項	年月日	概要				
3 実務の経験を有する者についての特記事項						
1. 病院薬剤師	1980年04月~1990年03月	京都府立医科大学附属病院薬剤部				
4 その他						
1 日本ビタミン学会奨励賞	1996年06月					

1.日本にグランチ云英朋リ			1330年00万	日ナス市で		
	研究業績等に関する事項					
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要		
 1 著書	/\ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \	70211174	71.0 4 1.0 1.0 1.0			
1. ビタミン・バイオ	共	2021年7月	朝倉書店	2020年発刊の「ビタミン総合事典」を11年ぶりに全面改定した事		
ファクター総合事典				典。今回は臨床的な話題が豊富に取り込まれた。編集委員を担当。		
				第2章水溶性ビタミン 2.1 ビタミンB1		
				2.1.1 はじめに(概要)p101-102、野坂和人		
				2.1.4 生化学・生理学(生合成と代謝)、plll-115、野坂和人、内		
				山良介		
				B5版、全672頁		
				日本ビタミン学会編集		
2.ビタミンの総合事典	共	2010年11月	朝倉書店	1910年のビタミン発見から100周年を記念して、全ビタミンの基礎か		
				ら臨床まで幅広く網羅した事典。		
				「Ⅱ水溶性ビタミン 第1章-1-3 チアミンの生合成,吸収,代謝」		
				p160-165、単独執筆		
				B5版、全624頁		
クラスゴスカルの生化	++-	1006年4日		日本ビタミン学会編集 執筆者160名		
3. コメデイカルの生化 学	共	1996年4月	廣川書店	コメディカル領域の学生を対象とした生化学の教科書。 「第6章 生体の恒常性と生体防御 1、ホルモン」p169-182、単独		
1				執筆 主体の世帯性と主体的側 1、ハルモン」 100 102、平弦		
				「第6章 生体の恒常性と生体防御 4、免疫」		
				p202-210、単独執筆		
				A4版、全221頁		
				川嵜敏祐監修、石原英子編 執筆者10名		
4.Vitamins and	共	1992年8月	Center for	ビタミンと生理活性因子の生命科学研究における最新の知見を紹		
Biofactors in Life			Academic	介。		
Science			Publications	「12. Recent Advances in Thiamine Research. Thiamin		
			Japan	Transport in Yeast and Some Aspects of Its Regulation」p375-		
				378		
				Iwashima A, Kawasaki Y, Nosaka K		
				(共同執筆につき本人担当分抽出不可能)		
	11.	1001 20 0	W A date) S &	B5版、全606頁、Kobayashi T ed. 執筆者401名		
5.酵母研究技法の新展	共	1991年9月	学会出版センター	酵母を対象とした最新の研究手法を紹介。 「現場理学物理会社はの質量関」14 新原においたスプラント関連物		
開				「Ⅲ生理学的研究技法の新展開 14,酵母におけるチアミンと関連物 質の輸送と代謝」p151-162		
				岩島昭夫、川﨑祐子、野坂和人、西村洋		
				A5版、全262頁、倉石衍編 執筆者51名		
6.Yeast as a Main	共	1989年4月	John Wiley &	Section VI. Yeast Biochemistry. Identity of Soluble		
Protagonist of		1000 1/3	Sons Ltd.	Thiamine-Binding Protein with Thiamine Repressible Acid		
Biotechnology				Phosphatase in Saccharomyces cerevisiae p447-451		
				Nosaka K, Nishimura H, Iwashima A		
				B5版、全547頁、Martini A, Martini AV eds.		
				執筆者236名		
2 学位論文						
1. High Affinity of	単	1990年2月	Biochim Biophys	出芽酵母のチアミン抑制型酸性ホスファターゼ (PH03) とリン酸抑		
Acid Phosphatase			Acta 1037(2)	制型酸性ホスファターゼ(PH05)を精製し、酵素学的性質を比較検		
Encoded by PHO3				計した。PHO3はチアミンリン酸エステルに非常に高い親和性を有		
Gene in Saccharo-				し、またその活性はチアミンに強く阻害されることから、生理的基質はチアミンリン酸エフテルであると考えられた。またル学修飾試		
myces cerevisiae for Thiamin				質はチアミンリン酸エステルであると考えられた。また化学修飾試 薬でPHO3のチアミン結合活性を不活化することで本酵素のチアミン		
Phosphates (査読						
付)				154 154		
3 学術論文	1	1	1	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		
1. New candidate	共	2023年7月	Chem Pharm Bull	didecyl-2-methyl imidazolium chloride (DiMI) は、十分な溶解度		
preservative in			71(7)	と熱及び光に対する安定性を示し、点眼剤で配合される主な添加物		
				· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
ophthalmic solution instead of benzalkonium chloride: 1,3- didecyl-2-methyl				とほとんど相互作用しないことが明らかにした。また、DiMIは点眼剤の保存剤として汎用されるbenzalkonium chloride (BAC) よりも保存効力が強く、in-vitro細胞毒性試験ではBACの安全性は同等であったことから、DiMIはBACに代わる点眼剤の保存剤として有用である可能性を示唆した。P552-557
imidazolium chloride (査読付)				Iwasaki T, Uchiyama R, Nosaka K (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
2.Difference in anti -microbial activity of propan -1,3-diol and propylene glycol (査読付)	共	2023年1月	Chem Pharm Bull 71(1)	防腐効力試験 (preservatives-effectiveness test) によって、Propan-1,3-diol (PD) は2-diol (propylene glycol) よりも保存効力が強く、その効果は大腸菌や緑膿菌に顕著であることを明らかにした。また、菌体膜の損傷作用がPDの抗菌作用に関与していることを示唆した。p74-77 Iwasaki T, Uchiyama R, Nosaka K (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
3.The hydrophobicity and antifungal potentiation of burkholdine analogues (査読付)	共	2022年2月	Molecules 27, https://doi.org/ 10.3390/ molecules2704119	burkholdineは抗真菌活性を有している。そこで、18種類のburkholdine誘導体を合成した。それらの化合物は抗真菌活性を有していなかったが、G418と併用することで、G418の抗真菌作用を増強させる効果を現した。pl-14 Konno H, Sasaki M, Sano H, Ozawa K, Nosaka K, Yano S (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
4. Synthesis of xylose-binding cyclic octalipopeptides burkholdine-1213 analogues (査読付)	共	2021年12月	Tetrahedron Lett 87, https:// doi.org/10.1016/ j.tetlet.2021	抗真菌活性を持つ環状オクタペプチド構造のburkholdineに糖を修飾させることで両親媒性を持たせることができる。そこで、キシロースを含有するburkholdine誘導体を初めて合成し、それらの出芽酵母、麹に対する抗真菌効果をを解析した。pl-5 Sasaki M, Kadowaki T, Kato S, Chida S, Yano S, Nosaka K, Konno H (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
5. 下級学年成績を用い た重回帰分析による 習熟度別講義のクラ ス判定とその評価 (査読付)	共	2020年4月	薬学教育 4, doi: 10.24489/jjphe. 2019-027	下級学年成績を用いた重回帰分析が、習熟度別講義におけるクラス 判定に有用であることを示した。pl-7 三浦健,安井菜穂美,篠塚和正,三木知博,野坂和人 (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
6. Convergent Synthesis of trans -2,6-Disubstituted Piperidine Alkaloid, (-)-iso- 6-Spectaline by Palladium- Catalyzed Cyclization (査読	共	2019年3月	Chem Pharm Bull 67(3)	パラジウム触媒による立体選択的環化反応を用いた ent-iso-6-spectaline の合成に成功した。また、本化合物の抗菌活性を表皮ブドウ球菌を用いて評価した。p253-257 Kameda R, Sohma T, Kobayashi K, Uchiyama R, Nosaka K, Konno H, Akaji K, Hattori Y (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
7.Thiamin transport in Helicobacter pylori lacking the de novo synthesis of thiamin (査読 付)	共	2019年2月	Microbiology (England) 165(2)	チアミンのde novo生合成酵素が欠損しているためチアミン要求性であるピロリ菌のチアミン取り込みについてHelicobacter pylori SS1株を用いて検討した。その結果、ピロリ菌にはチアミンを取り込む系が複数存在し、そのうちPnuTタンパク質が促進拡散による高親和性チアミン輸送タンパク質であること、PnuTタンパク質の生化学的性質、及びpnuT遺伝子はチアミンピロホスホキナーゼ遺伝子thi80とオペロンを形成していることを明らかにした。p224-232 Nosaka K, Uchiyama R, Tadano K, Endo Y, Hayashi M, Konno H, Mimuro H (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
8.Characterization of thiamin phosphate kinase in hyperthermophilic archaeon Pyrobaculum	共	2015年10月	J Nutr Sci Vitaminol 61(5)	古細菌では補酵素チアミンピロリン酸はチアミンリン酸キナーゼ(ThiLタンパク質)によって生成されることを明らかにし、ThiLの酵素学的性質を検討した。p369-374 Hayashi M, Nosaka K (共同研究につき本人担当分抽出不可能)

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
calidifontis(査読				
付) 9.Structure activity relationship study of	共	2015年8月	Bioorg Med Chem Lett 25(16)	抗真菌活性を持つ環状オクタペプチド構造のburkholdine誘導体を数種化学合成し、それらの出芽酵母、麹に対する抗真菌効果を測定することで構造活性相関を解析した。p3199-3202
burkholdine analogues toward simple anti fungal agents (査読付)				Konno H, Abumi K, Sasaki Y, Yano S, Nosaka K (共同執筆につき本人担当分抽出不可能)
10. Expanding the clinical and molecular spectrum of thiamine pyrophosphokinase deficiency: A treatable neurological disorder caused by TPKI mutations(查	共	2014年12月	Mol Genet Metabolism 113 (4)	チアミンピロホスホキナーゼ欠損症の新規神経症状について報告し、変異酵素の活性低下とタンパク質立体構造との関係について考察した。p301-306 Banka S, de Goede C, Yue W, Morris A, von Bremen B, Chandler K, Feichtinger R, Hart C, Khan N, Lunzer V, Matakovi L, Marquardt T, Makowski C, Prokisch H, Debus O, Nosaka K, Sonwalker H, Zimmermann F, Sperl W, Mayr J (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
読付)				
11.Enzymatic and structural characterization of an archaeal thiamin phosphate	共	2014年4月	Biochim Biophys Acta 1844(4)	古細菌のThiNタンパク質が真正細菌のThiEとは起源を異にするチアミンリン酸合成酵素であることを証明し、酵素学的解析とホモロジーモデリングで反応機構を考察した。p803-809 Hayashi M, Kobayashi K, Esaki H, Konno H, Akaji K, Tazuya K, Yamada K, Nakabayashi T, Nosaka K
synthase (査読付) 12.Effect of prime- site sequence of	共	2014年04月	Bioorg Med Chem 22(8)	(共同研究につき本人担当分抽出不可能) 成人T細胞白血病 I 型ウィルスプロテアーゼのレトロインベルソ型 阻害剤の最適化を検討し、高い阻害能を有する化合物の合成に成功
retro-inverso- modified HTLV-1 protease inhibitor (査読付)				した。p2482-2488 Awahara C, Tatsumi T, Furuta S, Shinjoh G, Konno H, Nosaka K, Kobayashi K, Hattori Y, Akaji K (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
13.Chemoselective Hydrogenation Catalyzed by Pd on Spherical Carbon (香読付)	共	2013年11月	Chem Cat Chem 5 (12)	球状炭素にコーティングしたPdによる接触触媒反応の官能基に対する特異性および効率について報告した。p3629-3635 Esaki H, Hattori T, Tsubone A, Mibayashi S, Sakata T, Sawama Y, Monguchi Y, Yasuda H, Nosaka K, Sajiki H (共同執筆につき本人担当分抽出不可能)
14.Practical synthesis of peptide C-terminal aldehyde on a solid support (査読	共	2013年09月	Tetrahedron Lett 54(36)	我々が汎用している固相法によるペプチドアルデヒド合成法では、 アセタールーチオアセタールの転換を介して効率よくペプチドアル デヒドが合成されていること明らかにした。 p4848-4850 Konno H, Sema Y, Ishii M, Hattori Y, Nosaka K, Akaji K
付) 15.Synthesis and antifungal activities of	共	2013年7月	Bioorg Med Chem Lett 23(14)	(共同執筆につき本人担当分抽出不可能) 環状オクタペプチド構造のburkholdine誘導体を20数種化学合成し、 それらの出芽酵母、麹菌、カンジダ等の真核微生物に対する抗真菌 効果を検討した。p4244-4247
cyclic octa- lipopeptide burkholdine analogues(査読付)				Konno H, Otsuki Y, Abumi K, Matsuzaki K, Nosaka K (共同執筆につき本人担当分抽出不可能)
16.A practical synthesis of a hydroxylated sesquiterpene coumarin 10' R- acetoxy-11' - hydroxy-	共	2013年01月	Heterocycles 87 (2)	位置選択的シャープレス不斉ジヒドロキシル化反応によってセスキテルペンクマリン誘導体の合成に成功した。p423-428 Hattori Y, Kinami G, Teruya K, Nosaka K, Kobayashi K, Akaji K (共同執筆につき本人担当分抽出不可能)
umbelliprenin by regioselective				

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・	発行又は	発行所、発表雑誌等	概要
	共著書別	発表の年月	又は学会等の名称	1711.54
3 学術論文 dihy-droxylation				
(査読付)				
17. Facilitated	共	2012年04月	FEMS Microbiol	 出芽酵母をチアミン欠乏状態にすると、転写因子Pdc2がチアミン生
recruitment of			Lett 330(2)	合成酵素群ならびにピルビン酸脱炭酸酵素遺伝子PDC5の上流にリク
Pdc2p, a yeast				ルートされることを、クロマチン免疫沈降法を用いて明らかにし
transcriptional				た。また、pdc2の認識DNA配列を推定した。p140-147
activator, in				Nosaka K, Esaki H, Onozuka M, Konno H, Hattori Y, Akaji K
response to				(共同執筆につき本人担当分抽出不可能)
thiamin starvation				
(査読付) 18.Synthesis of	++-	2011年11月	Tetrahedron 67	 ワインレブアミド樹脂を用いて、海洋性海綿動物由来のシステイン
tokaramide A, a	共	2011年11月	(47)	プロテアーゼ阻害剤tokaramide Aの全合成に成功した。p9067-9071
cysteine protease			(41)	フロケテー CM音列tokaramrue NOO主日域に成功した。p3007-3071
inhibitor from				Konno H, Nosaka K, Akaji K
marine sponge				(共同執筆につき本人担当分抽出不可能)
Theonella aff.				
mirabilis (査読付)				
19. Solid Phase Total	共	2011年07月	Tetrahedron Lett	固相法によって、抗HIV活性と抗真菌活性を持つ海洋性海綿動物由来
Synthesis of			52(30)	のヘキサペプチドCallipeltin Eの全合成に成功した。p3872-3875
Callipeltin E isolated marine				Kikuchi M, Nosaka K, Akaji K, Konno H
sponge Latrunculia				(共同執筆につき本人担当分抽出不可能)
sp. (査読付)				
20. Synthesis of	共	2010年10月	Tetrahedoron 66	 バンレイシ科由来のアセトゲニン類全合成を交差メタセシス反応を
solamin type mono-			(40)	用いることで成功させた。p7946-7953
THF acetogenins				Konno H, Makabe H, Hattori Y, Nosaka K, Akaji K
using cross-				(共同執筆につき本人担当分抽出不可能)
methathesis(査読				
付)		0010 1010	D. V. 1 01	Described to the second of the
21. Evaluation of	共	2010年04月	Bioorg Med Chem	成人T細胞白血病ウィルス(HTLV-1)プロテアーゼ阻害剤の retro
retro-inverso modifications of			18(7)	inverso ペプチドを数種類合成し、それらの抗プロテアーゼ活性を 評価した。p2720-2727
HTLV-1 protease				Tatsumi T, Awahara C, Naka H, Aimoto S, Konno H, Nosaka K,
inhibitors				Akaji K
containing a				(共同執筆につき本人担当分抽出不可能)
hydroxyethylamine				
isoster (査読付)				
22. Synthetic Studies	共	2010年01月	Heterocycles 81	Callipeltine Aに含まれる異常アミノ酸類をD-および L-セリンから
on Callipeltins: Stereoseletictive			(1)	立体選択的に合成することに成功した。p79-89
Synthesis of (3S,				Konno H, Takebayashi Y, Nosaka K, Akaji K (共同執筆につき本人担当分抽出不可能)
4R)-3,4-dimethyl-L				(共刊執事に ノゼ 本八担ヨガ 抽山小町 化)
-pyroglutamic Acid				
and Fmoc-D-				
allothreonine from				
Serine				
Derivatives(査読				
付)	11.	2000 500 5	Di W 1 01	↑ トマトノンの内はnonc かもし、b ~は田はははせったマッロロコ
23. Synthesis of [19, 35, 36-13C3]-	共	2009年08月	Bioorg Med Chem 17(16)	β-ケモカイン受容体CCR5の強力かつ特異的拮抗薬であるTAK779の位 署選切的12 C 同位体ラベルに成功した。p5769-5774
labeled TAK779 as			17(10)	置選択的13C同位体ラベルに成功した。p5769-5774 Konno H, Aimoto S, Smith SO, Nosaka K, Akaji K
a Molecular Probe				(共同執筆につき本人担当分抽出不可能)
(査読付)				
24. Intracellular	共	2009年06月	Histochem Cell	共焦点ラマン顕微鏡によってトポイソメラーゼ I 阻害剤であるCPT-
Dynamics of			Biol 132(1)	1の細胞内動態を観察し、本法が生細胞におけるこの抗腫瘍剤の薬物
Topoisomerase I				動態解析に有用であることを示した。p36-46
Inhibitor, CPT-11,				Harada Y, Dai P, Yamaoka Y, Ogawa M, Yanaka H, Nosaka K,
by Slit-scanning				Akaji K, Takamatsu T
Confocal Raman		L		(共同執筆につき本人担当分抽出不可能)

研究業績等に関する事項					
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要	
3 学術論文	共有盲別	光衣の千万	人は子芸寺の石林		
Microscopy(査読					
付)					
25. Thiamin-dependent	共	2008年12月	FEBS Lett 582	出芽酵母のチアミン調節系において、転写因子Pdc2の転写活性とコ	
Transactivation			(29)	リプレッサーであるチアミンピロリン酸センサータンパク質Thi3と	
Activity of PDC2				の相互作用が、チアミン欠乏状態で上昇することを報告した。ま	
in Saccharomyces				た、種々の欠失タンパク質を作成してPdc2の機能領域を推定した。	
cerevisiae(査読				p3991-3996	
付)				Nosaka K, Onozuka M, Konno H, Akaji K	
26 Evaluation of	++-	2000年11日	Disana Wad Cham	(共同執筆につき本人担当分抽出不可能)	
26.Evaluation of Peptide-aldehyde	共	2008年11月	Bioorg Med Chem 16(21)	SARS 3CLプロテアーゼの自己消化部位を特定し、変異導入によって 消化抵抗性タンパク質を作成した。その結果、阻害剤スクリーニン	
Inhibitors using			10(21)	グと結晶構造解析に有用となる高い活性を持つ酵素を多量に得るこ	
R188I Mutant of				とができた。p9400-9408	
SARS 3CL Protease				Akaji K, Konno H, Onozuka M, Makino A, Saito H, Nosaka K	
as a Proteolysis-				(共同執筆につき本人担当分抽出不可能)	
resistant Mutant					
(査読付)					
27. Involvement of	共	2008年03月	FEMS Yeast Res 8	出芽酵母の多機能酵素Thi20が持つチアミナーゼⅡ活性の生理的役割	
Thiaminase II			(2)	は、チアミン分解ではなくアミノメチルピリミジンのようなHMP前駆	
Encoded by the				物質を加水分解しHMPのサルベージ合成であることを明らかにした。	
THI20 Gene in				p266-275	
Thiamin Salvage of				Onozuka M, Konno H, Kawasaki Y, Akaji K, Nosaka K	
Saccharomyces				(共同執筆につき本人担当分抽出不可能)	
cerevisiae(査読					
付) 28.Total Synthesisof	共	2008年01月	Tetrahedron Lett	 バンレイシ科由来のアセトゲニンであるSolaminはミトコンドリア複	
cis-Solamin A, a	六	2000年01万	49(5)	合体 I に強い阻害作用を示す。(-)-muricatacinから4.5%の収率で	
Mono-			10(0)	cis-Solaminを全合成した。p782-785	
tetrahydrofuran				Konno H, Okuno Y, Makabe H, Nosaka K, Onishi A, Abe Y,	
Acetogenin				Sugimoto A, Akaji K	
Isolated from				(共同執筆につき本人担当分抽出不可能)	
Annona muricata (査					
読付)					
29. Stereoselective	共	2007年10月	Synthesis 2007	Callipeltin Eに含まれる異常アミノ酸であるβ-Methoxytyrosineの	
Synthesis of All			(23)	全ジアステレオマーの不斉合成に成功した。また、Callipeltin E内	
Stereoisomers of β				のβ-Methoxytyrosineの立体構造を推定した。	
-Methoxy Tyrosine Derivatives for				p3666-3672 Konno H, Aoyama S, Nosaka K, Akaji K	
Identification of				(共同執筆につき本人担当分抽出不可能)	
the Absolute				(
Configura-tion in					
Callipeltin E (査読					
付)					
30.Total Synthesis of	共	2007年09月	Tetrahedron 63	海洋性海綿動物由来のペンタペプチドMiraziridine Aの全合成に成	
Miraziridine A			(38)	功した。また、システインプロテアーゼであるカテプシンBに対す	
and Identification				る前駆体の阻害効果から、Miraziridine Aの活性部位を推定した。	
of Its Major				p9502-9513	
Reaction Site for				Konno H, Kubo K, Makabe H, Toshiro E, Hinoda N, Nosaka K,	
Cathepsin B (査読 付)				Akaji (共同執筆につき本人担当分抽出不可能)	
1일 / 31.NGF-dependent	共	2007年07月	Neurochem Int 51	(共同執筆につき本人担当が抽出不可能) 神経成長因子処理によるPC12D細胞のラッフル形成誘導のシグナル伝	
Formation of		12001年01万	(2-4)	達について検討した。その結果、RaclとCdc42の活性化を必要とした	
Ruffles in PC12D			\/	が、Ras、PI-3k、AKT、GSK-3 β は関与していないことが示唆され	
Cells Required a				た。p216-226	
Different Pathway				Jin E, Nosaka K, Sano M	
from That for				(共同執筆につき本人担当分抽出不可能)	
Neurite Outgrowth					
(査読付)		0005			
32. Studies on	共	2007年06月	International	ヒトT細胞白血病ウィルスHTLV-1プロテアーゼの切断部位を含む種々	

組換え酵素を用いて
77 m m
ka K, Tatsumi T,
T 111 1 2 10 T 1 2
て用いられている。
neのL-プロリンから
Vosaka K, Akaji K
iosaka n, akaji n
基質認識に必要な切
を 性の阻害に効果的
百圧の阻害に効木町
ni T, Konno H,
ii i, komio ii,
プロテアーゼ阻害剤の
含有オレフィンペプ
ーゼ活性を効果的に
H, Nosaka K,
応答して発現が上昇
ン調節系における転
は細胞内シグナルで
チアミン生合成酵素
67-479
Vishimura H, Sano
生乳酸アシドーシス
しかし、原因異常
104
zuka M, Nosaka K,

:流領域を単離し、
ツセイとゲルシフト
して調節されている
saka K
ana n
生合成経路の2つの
全自成性品の2 000 を触媒する2機能酵
ハて証明した。p156
- mm /2 0 / 20 F 200
ヒトチアミンピロ
遊離のATPにより阻
的な置換体を作製
を同定した。p156-

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
(査読付)				(共同研究につき本人担当分抽出不可能)
41.Isolation and Characterization of a Human Thiamin Pyrophosphokinase cDNA(査読付)	共	2001年01月	Biochim Biophys Acta 517(2)	ヒトのチアミンピロホスホキナーゼのcDNA (hTPK1) を単離し、大腸菌で高発現させ酵素活性を確認した。hTPK1 mRNAの発現は非常に低レベルで組織特異性はほとんどなく、ハウスキーピング遺伝子と考えられた。また、FISH法でhTPK1遺伝子座を7番染色体長腕7q34と決定した。p293-297 Nosaka K, Onozuka M, Kakazu N, Hibi S, Nishimura H, Nishino H, Abe T
42.Molecular Cloning and Expression of a Mouse Thiamin Pyrophospho-kinase cDNA(查読付)	共	1999年11月	J Biol Chem 274 (48)	(共同研究につき本人担当分抽出不可能) マウスのチアミンピロホスホキナーゼのcDNA(mTPK1)を、ESTデータベース解析、two-step PCR法、出芽酵母thi80変異株の機能相補スクリーニングを組み合わせて単離し、その翻訳可能領域を大腸菌で高発現させ酵素活性を確認した。培養マウス神経芽細胞腫を用いた実験からmTPK1の発現はチアミンにより制御されないことを明らかにした。p34129-34133 Nosaka K, Onozuka M, Nishino H, Nishimura H, Kawasaki Y,
43.Suppression of Lung and Liver Carcinogen-esis in Mice by Oral Administration of Myoinositol(査読	共	1999年09月	Anticancer Res 19(5A)	Ueyama H ミオイノシトールの経口投与によりマウスの肺および肝臓の発癌が 抑制されることを示した。 p3663-3664 Nishino H, Murakoshi M, Masuda M, Tokuda H, Satomi Y, Onozuka M, Yamaguchi S, Bu P, Tsuruta A, Nosaka K, Baba M, Takasuka N
付) 44.Mutations in SLC19A2 Cause Thiamine- responsive Megalo- blastic Anaemia Associated with Diabetes Mellitus and Deafness (查読	共	1999年07月	Nature Genet 22	(共同研究につき本人担当分抽出不可能) チアミン反応性貧血症候群原因遺伝子としてSLC19A2 を同定した。 全ての患者で、SLC19A2のタンパク質翻訳可能領域にホモで変異が認 められた。また、SLC19A2はチアミン輸送タンパク質であることを証 明した。p300-304 Labay V, Raz T, Baron D, Mandel H, Williams H, Barrett T, Szargel R, McDonald L, Shalata A, Nosaka K, Gregory S, Cohen N (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
45.Refined Mapping of the Gene for Thiamine- responsive Megaloblastic Anemia Syndrome and Evidence for Genetic Homogeneity (査読	共	1998年10月	Hum Genet 103(4)	チアミン反応性貧血症候群の 7 家系についてゲノムDNAを調製しホモ接合性マッピングによる連鎖解析を行った。本症は単一遺伝子疾患であり原因遺伝子は第 1 番染色体長腕1q23.2-23.3に存在することを明らかにした。p455-461 Raz T, Barrett T, Szargel R, Mandel H, Neufeld EJ, Nosaka K, Viana MB, Cohen N (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
46. An Antisense EGFR Oligodeoxynucleoti de Enveloped in Lipofec-tin R Induces Growth Inhibition in Human Malignant Gliomas in Vitro	共	1998年09月	J Neurooncol 39	グリオーマの悪性化に密接に関与する表皮成長因子受容体(EGFR)のチロシンキナーゼ部位に対するアンチセンスオリゴヌクレオチドのリポフェクチン製剤をEGFR mRNA高発現グリオブラストーマ培養細胞に投与したところ、増殖速度とチロシンキナーゼ活性が有意に低下し本法の有用性を示唆した。p237-244 Sugawa N, Ueda S, Nakagawa Y, Nishino H, Nosaka K, Iwashima A, Kurimoto M (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
47.A Brassica cDNA Clone Encoding a Bifunc-tional Hydroxymethyl- pyrimidine Kinase /Thiamin-phosphate Pyrophosphorylase	共	1998年08月	Plant Mol Biol 37(6)	植物のチアミン生合成系遺伝子のcDNAクローンBTH1をアブラナから 単離した。BTH1タンパク質はTMP合成酵素活性とHMPキナーゼ活性を 併せ持つ2機能酵素であることを生化学的、遺伝学的に証明し、 BTH1遺伝子の発現はチアミンによって抑制を受けることを示した。 p955-966 Kim YS, Nosaka K, Downs DM, Kwak JM, Park D, Chung IK, Nam HG

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文 Involved in				(共同研究につき本人担当分抽出不可能)
Thiamin Biosynthesis (査読 付)				
48.Association of Nucleoside Di- phosphate Kinase nm23-H2 with Human Telomeres(査読 付)	共	1998年02月	Biochem Biophys Res Commun 243 (2)	哺乳動物の染色体末端テロメア配列に特異的に結合するタンパク質 TRF1と相互作用するタンパク質を酵母two-hybrid解析でスクリーニングし、NDPキナーゼnm23-H2を単離した。in vitroの系でもTRF1と nm23-H2が結合すること、またnm23-H2は一本鎖のテロメア配列にも結合することを明らかにした。p342-348 Nosaka K, Kawahara M, Masuda M, Satomi Y, Nishino H (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
49.Mutation thi81 Causing a Deficiency in the Signal Trans- duction of Thiamine Pyrophosphate in Saccharomyces cerevisiae (査読	共	1997年11月	FEMS Microbiol Lett 156(2)	出芽酵母チアミン調節系変異株thi81を分離した。thi81変異株では 培地にチアミンが存在してもチアミン代謝系酵素群の発現が抑制を 受けないことから、THI81遺伝子は酵母のチアミン代謝制御機構にお いて代謝酵素群の発現を抑制する作用を持つ調節因子であることを 示唆した。p245-249 Nishimura H, Kawasaki Y, Nosaka K, Kaneko Y (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
50. Isolation and Characterization of a Thiamin Transport Gene, THI10, from Saccharomyces cerevisiae (査読	共	1997年08月	J Biol Chem 272 (31)	出芽酵母のチアミン輸送タンパク質遺伝子THI10を単離した。本翻訳産物は12回貫通型膜タンパク質と予想された。THI10破壊株はチアミン輸送活性と形質膜のチアミン結合活性を完全に消失すること、およびTHI10の発現は細胞内のチアミンピロリン酸によって制御されることを証明した。p19165-19170 Enjo F, Nosaka K, Ogata M, Iwashima A, Nishimura H (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
51.Adenosine Kinase- deficient Mutant of Saccharomyces cerevisiae (査読 付)	共	1995年03月	FEMS Microbiol Lett 127(1, 2)	アデノシンの代謝拮抗物質であるコルディセピンの耐性変異株を分離した。本変異株はアデノシンキナーゼ欠損株であること、また培地にアデノシンを添加すると細胞内にS-アデノシルホモシステインが蓄積し形態が菌糸状になることを示した。p23-28 Iwashima A, Ogata M, Nosaka K, Nishimura H, Hasegawa T (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
52. Isolation and Charac-terization of the THI6 Gene Encoding a Bifunctional Thiamin-phosphate Pyrophos-phorylase / Hydroxyethylthiazo le Kinase from Saccharomyces cerevisiae (査読	共	1994年12月	J Biol Chem 269 (48)	出芽酵母のTHI6遺伝子を単離した。本遺伝子産物はTMP合成酵素活性と、HETキナーゼ活性を併せ持つ2機能酵素であることを証明し、両酵素活性の機能領域を決定した。さらに、THI6遺伝子破壊株はチアミン要求性になること、本遺伝子は酵母のチアミン調節系によって発現制御されることを明らかにした。p30510-30516 Nosaka K, Nishimura H, Kawasaki Y, Tsujihara T, Iwashima A (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
53.Basic Fibroblast Growth Factor Messenger RNA Is Expressed Strongly at the Acute Stage of Cerebral Contusion (查読付)	共	1994年10月	Life Sci 55(21)	ラット脳に打撲傷を与えると、2日後には大脳での線維芽細胞成長 因子bFGFのmRNA量が対照の3倍にまで増加していることを明らかに し、外傷時の二次的な損害に対する神経の保護にbFGFが関わってい ることを示唆した。p1651-1656 Iwamoto Y, Yamaki T, Murakami N, Sugawa N, Yoshino E, Ueda S, Nosaka K, Nishino H, Iwashima A (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
54. リポソーム-SODの調製と静脈内投与後の血中動態(査読付)	共	1994年01月	病院薬学 20(1)	虚血性組織病変や炎症におけるスーパーオキシドディスムターゼ (SOD) の有効性が知られている。ポリエチレン誘導体を付与したリポソームによるSOD封入製剤を無菌調製しラットに静注投与したところ、SOD活性の血中滞留時間の延長が確認された。p1-9

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
55.Isolation and Characterization of a Thiamin Pyrophospho-kinase Gene, THI80, from Saccharomyces cerevisiae (查読	共	1993年08月	J Biol Chem 268 (23)	平田勲,田中佐和子,芦原雅代,塚本茂,杉岡信幸,岸本英機,吉川敏一,谷川徹,内藤裕二,近藤元治,野坂和人 (共同研究につき本人担当分抽出不可能) 出芽酵母のチアミンピロホスホキナーゼ遺伝子THI80を単離し、大腸菌で高発現させ酵素活性を確認することにより本酵素の一次構造を初めて解明した。また、相同組換えを利用して作成したTHI80ゲノム破壊株は生育できないこと、THI80遺伝子の発現は酵母チアミン代謝制御機構で部分的に調節を受けることを証明した。p17440-17447 Nosaka K, Kaneko Y, Nishimura H, Iwashima A (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
56. Inhibitory Effect of Diltiazem on Diazepam Metabolism in the Mouse Hepatic Microsomes (査読	共	1993年03月	Biol Pharm Bull 16(3)	抗カルシウム剤ジルチアゼムがマウス肝ミクロゾーム画分による抗不安剤ジアゼパムの脱メチル化を非競合的に阻害することを明らかにし、両薬剤の併用によりジアゼパムの代謝が低下することを示唆した。p331-333 Ihara N, Kokufu T, Sugioka N, Ohta T, Nosaka K (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
57.Effect of Thiamin on Cordycepin Sensitivity in Saccharomyces cerevisiae (査読	共	1992年10月	FEBS Lett 311(1)	チアミン輸送変異株ではアデノシンの取り込みが減少すること、アデノシン代謝拮抗物質コルディセピン耐性変異株のチアミン輸送活性が低下していることから、酵母ではチアミン輸送系を介してアデノシンが取り込まれることを示唆した。p60-62 Iwashima A, Kawasaki Y, Nosaka K, Nishimura H (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
58. 眼振と脳梗塞,網膜 色素変性症を合併し たチアミン反応性貧 血症候群の一例(査 読付)	共	1992年09月	日本小児科学会雑誌 96(9)	巨赤芽球性貧血、感音性難聴、糖尿病を三主徴とする先天性代謝異常症であるチアミン反応性貧血症候群の本邦初例を報告した。チアミンの大量投与によりこれらの症状は軽減し、原因酵素としてチアミンピロホスホキナーゼかチアミン輸送タンパク質が疑われた。p2137-2145 森本哲,木崎善郎,小西清三郎,佐藤典子,片岡季久,林玲二,井上文夫,衣笠昭彦,沢田淳,今宿晋作,野坂和人,西村洋(共同研究につき本人担当分抽出不可能)
59.Upstream Activation Element of the PH03 Gene Encoding for Thiamine- Repressible Acid Phosphatase in Saccharomyces cerevisiae (査読	共	1992年07月	FEBS Lett 305(3)	出芽酵母のチアミン抑制型酸性ホスファターゼ遺伝子PHO3の5'上流 領域について種々の欠失変異を作成し、発現活性化領域を推定し た。また、この領域と結合するタンパク質がチアミン非添加培地で 生育した酵母の核抽出物に存在することを示した。p244-248 Nosaka K, Yamanishi K, Nishimura H, Iwashima A (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
60.A Positive Regulatory Gene, TH13, Is Required for Thiamine Metabolism in Saccharomyces cerevisiae (査読	共	1992年07月	J Bacteriol 174 (14)	出芽酵母のチアミン要求性変異株thi3を単離した。THI3遺伝子はチアミン生合成酵素群やチアミン輸送活性の発現に必要であり、チアミン調節系における正の調節因子であることを明らかにした。p4701-4706 Nishimura H, Kawasaki Y, Kaneko Y, Nosaka K, Iwashima A (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
61.Cloning and Characteristics of a Positive Regulatory Gene, TH12(PH06), of Thiamin Biosynthesis in Saccharomyces cerevisiae (査読	共	1992年02月	FEBS Lett 297(1, 2)	出芽酵母のチアミン代謝調節タンパク質THI2はチアミン生合成酵素群の発現に必要である。しかし、チアミン輸送活性はthi2欠損変異株でも親株同様に検出されることから、チアミン輸送タンパク質は生合成酵素群とは部分的に異なる調節を受けていることが示唆された。p155-158 Nishimura H, Kawasaki Y, Kaneko Y, Nosaka K, Iwashima A (共同研究につき本人担当分抽出不可能)

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文	1	Г		T
付) 62.A Constitutive Thiamine Metabolism Mutation, thi80, Causing Reduced Thiamine Pyrophospho-kinase Activity in Saccharomyces cerevisiae(査読	共	1991年08月	J Bacteriol 173 (8)	出芽酵母のチアミン代謝系酵素がチアミンによる抑制を受けない構成性発現変異株thi80を分離した。本株ではチアミンピロホスホキナーゼ活性が低下しており、チアミンピロリン酸の細胞内濃度が低く保たれていることから、酵母のチアミン代謝制御機構におけるコリプレッサーがチアミンピロリン酸であることが示唆された。p2716-2719 Nishimura H, Kawasaki Y, Nosaka K, Kaneko Y, Iwashima A (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
63.Regulation of Thiamine Biosynthesis in Saccharomyces cerevisiae (査読 付)	共	1990年10月	J Bacteriol 172 (10)	チアミン抑制型酸性ホスファターゼの発現変異株である出芽酵母pho6株がチアミン要求性を示し、前駆物質からのチアミン合成活性が検出されないことを明らかにした。また、チアミン合成活性が培地への高濃度チアミン添加により抑制されることから、酵母にはPH06遺伝子が正の調節因子として関与するチアミン代謝調節機構が存在することが示唆された。p6145-6147 Kawasaki Y, Nosaka K, Kaneko Y, Nishimura H, Iwashima A (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
64.Photoaffinity Labeling of Thiamin-Binding Component in Yeast Plasma Membrane with [3H]4-Azido-2	共	1989年09月	FEBS Lett 255(1)	光親和性標識化合物である3H-4-アジド-2-ニトロベンゾイルチアミンを合成し、本化合物が光照射により出芽酵母形質膜タンパク質のチアミン結合部位に不可逆的に結合することを明らかにした。p154-158 Nishimura H, Sempuku K, Kawasaki Y, Nosaka K, Iwashima A (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
nitrobenzoylthiami n (査読付)				
65.A Possible Role for Acid Phosphatase with Thiamin-Binding Activity Encoded by PH03 in Yeast (査読付)	共	1989年7月	FEMS Microbiol Lett 60(1)	出芽酵母のチアミン抑制型酸性ホスファターゼ欠損変異株pho3における14C-チアミンリン酸エステル類の取り込みが大きく低下したので、Pho3タンパク質はチアミンリン酸エステルのチアミン部分の利用に必要な酵素であることが示唆された。p55-60 Nosaka K, Kaneko Y, Nishimura H, Iwashima A (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
66. Identity of Soluble Thiamin- Binding Protein with Thiamin- Repressible Acid Phosphatase in Saccharomyces cerevisiae (査読	共	1988年10月	Biochim Biophys Acta 967(1)	出芽酵母の細胞表層に分泌される可溶性チアミン結合タンパク質と酸性ホスファターゼのアイソザイムPho3がともにチアミンにより発現抑制を受けることから、両タンパク質の同一性を検討した。生化学的、遺伝学的解析から両者は同一のタンパク質であると結論した。p49-55 Nosaka K, Nishimura H, Iwashima A (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
67. Inactivation of the Thiamine Transport System in Saccharomyces cerevisiae with 0-Bromoacetylthiamin e (査読付)	共	1988年10月	Arch Biochem Biophys 266(1)	出芽酵母のチアミン輸送阻害剤としてプロモアセチルチアミンを化学合成した。本化合物は膜のチアミン輸送タンパク質と非可逆的に結合することが示唆され、チアミン輸送タンパク質の検出に有用である可能性を示した。p248-253 Nishimura H, Sempuku K, Nosaka K, Iwashima A (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
e (宜祝内) 68. フルオレセイン添加 ベノキシール点眼液 の実用性の検討(査 読付)	共	1987年07月	あたらしい眼科 4 (7)	院内製剤であるフルオレセイン-ベノキシール点眼薬に塩酸オキシブプロカインを混合させることにより、本点眼薬の微生物汚染を消失させることに成功し本製剤の有用性を示した。p1015-1017 山口朋子,河窪麻里子,岡本孝子,中沢里恵,野坂和人,西田克次,水野政直 (共同研究につき本人担当分抽出不可能)

			研究業績等に	
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文		100=1:0::	#### W := (-)	11
69. ラットにおけるバル プロ酸ナトリウムの 直腸吸収(査読付)	共	1987年3月	薬剤学 47(1)	抗てんかん剤バルプロ酸ナトリウムの坐薬を調製した。油脂性基剤を用いた本製剤のラットの直腸投与時における生体内利用率が、経口投与におとらぬ利用率と短時間で高い血漿中濃度が得られることを明らかにした。p38-42 杉岡信幸、岡田耕二、井原憲彦、野坂和人、水野政直
70.Thiamine-Binding Activity of Saccharomyces cerevisiae Plasma Membrane (査読付)	共	1986年6月	Experientia 42 (6)	(共同研究につき本人担当分抽出不可能) 出芽酵母の形質膜とミトコンドリア膜画分をそれぞれ調製し、膜の チアミン結合活性が主に形質膜画分に存在していること、およびチ アミン輸送欠損変異株では本活性がほとんど消失していることを明 らかにした。p607-608 Nishimura H, Nosaka K, Sempuku K, Iwashima A
71. Effect of Tunicamycin on Thiamine Transport in Saccharomyces	共	1986年6月	Biochim Biophys Acta 858(2)	(共同研究につき本人担当分抽出不可能) 抗生物質ツニカマイシンの処理により、チアミン輸送活性と膜のチアミン結合能が低下することを証明し、チアミン輸送タンパク質がゴルジ体で糖付加修飾を受ける糖タンパク質であることが示唆された。p309-311
cerevisiae (査読 付) 72.Some Properties of a Saccharomyces cerevisiae Mutant Resistant to 2- Amino-4-methyl-5-β	共	1986年6月	J Gen Microbiol 132(6)	Nosaka K, Nishimura H, Iwashima A (共同研究につき本人担当分抽出不可能) 出芽酵母のチアミン前駆体であるヒドロキシエチルチアゾール (HET) の代謝拮抗物質であるアミノヒドロキシエチルチアゾール耐性変異株を分離し、この株がHETキナーゼ欠損株であることを生化学的に証明した。p1541-1546 Iwashima A, Nosaka K, Nishimura H, Kimura Y
hydroxyethylthiazo le (査読付) 73. Inactivation of Rice Bran Thiamine -Binding Protein by N,N'-Dicy- clohexylcarbodiimi	共	1984年10月	J Biochem 96(4)	(共同研究につき本人担当分抽出不可能) 米糠のチアミン結合タンパク質がカルボキシル基修飾試薬ジシクロ ヘキシルカルボジイミドによって不活化されることを観察し、本タ ンパク質のチアミン結合部位に酸性アミノ酸残基が関与しているこ とが示唆された。p1289-1295 Nishimura H, Sempuku K, Nosaka K, Iwashima A
de (查読付) 74.Reversal of Pyrithiamine- Induced Growth Inhibition of Saccharomyces cerevisiae (查読	共	1984年6月	Experientia 40 (6)	(共同研究につき本人担当分抽出不可能) チアミンのチアゾール部の誘導体であるピリチアミンとピリミジン 部の誘導体であるオキシチアミンはそれぞれ単独では出芽酵母の生 育を阻害するが、両者を同時に培地に加えると酵母は生育したこと から、酵母にピリミジンとチアゾールからチアミンが生成されるサ ルベージ経路が存在することが示唆された。p582-583 Iwashima A, Yoshioka K, Nishimura H, Nosaka K (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
付) 75. Separate Determina -tion of Anticoccidial Thiamine Analogs by High- Performance Liquid Chromatography(查 読付)	共	1984年6月	Acta Vitaminol Enzymol 6(2)	抗鶏球虫剤として用いられているクロルエチルチアミンとジメチアリウムのチオクロム化とHPLCによる高感度特異的定量法を開発した。また、クロロエチルチアミンが出芽酵母のチアミン輸送系を介して細胞に取り込まれることを示した。p137-143 Nosaka K, Nishimura H, Iwashima A (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
その他				
1. 学会ゲストスピーカー 1. 出芽酵母のチアミン ピロリン酸シグナル による発現調節解析	単	2005年3月 18日	第61回酵母研究 会,西宮	
2. 酵母のチアミンリン 酸代謝酵素系の分子 遺伝学的研究	単	1996年6月5日	日本ビタミン学会 第48回大会,東京	日本ビタミン学会奨励賞受賞講演
3. 酵母のチアミンピロリン酸生合成酵素系の遺伝子解析 2. 学会発表	単	1995年3月 16日	第43回酵母研究 会,京都	

研究業績等に関する事項					
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要	
2. 学会発表					
1. ユーグレナにおける パラミロンの原料と なるUMP産生経路の検 討	共	2025年3月27日	日本薬学会第145年 会,福岡	林麻利亜,池田珠央,上村亜里沙,宮田義巳,内山良介,野坂和人	
記2.細菌感染におけるFasシグナル依存的な 炎症性サイトカイン産生のメカニズム	共	2025年3月 27日	日本薬学会第145年会,福岡	内山良介, 井根颯希, 内海妃那, 河村涼羽, 安平真愛, 湯浅真子, 宮田義巳, 林麻利亜, 野坂和人	
3. Fasシグナルを介した 炎症性サイトカイン 産生経路の解析	共	2024年3月30日	日本薬学会第144年 会,横浜	内山良介,林麻利亜,宮田義巳,野坂和人	
4. ユーグレナのパラミ ロン高産生条件下に おけるGSL2の発現検 討	共	2024年3月30日	日本薬学会第144年 会,横浜	林麻利亜,羽生鈴,水谷萌,宮田義巳,内山良介,野坂和人	
5. Fasシグナル経路を介 した炎症応答におけ るcaspaseの関与	共	2023年3月 26日	日本薬学会第143年 会,札幌	内山良介,筒井ひろ子,林麻利亜,宮田義巳,野坂和人	
6. ピロリ菌のチアミン 取り込みを阻害する 化合物の探索	共	2023年3月4日	第470回ビタミンB 研究協議会,刈谷	野坂和人, 内山良介, 林麻利亜, 來海徹太郎	
7. ピロリ菌の菌体表層 に存在するチアミン リン酸ホスファター ゼについて	共	2022年3月5日	第466回ビタミンB 研究協議会,オン ライン	野坂和人,内山良介,林麻利亜	
8. ピロリ菌のチアミン 輸送タンパク質欠損 が胃粘膜上皮細胞感 染に及ぼす影響	共	2020年11月 28日	第461回ビタミンB 研究協議会,オン ライン	野坂和人,松田萌,内山良介	
9. ピロリ菌のチアミン 輸送タンパク質欠損 が胃粘膜上皮細胞感 染に及ぼす影響	共	2020年10月 10日	第70回日本薬学会 関西支部大会,オ ンライン	松田萌,内山良介,林麻利亜,遠藤祐里奈,栗田明日佳,栗本麻加,小坂美鈴,野坂和人	
に及ばり影音* 10.アーキアにおけるビタミンB6の生合成経路**	共	2020年9月4日	日本ビタミン学会 第72回大会,オン ライン	有馬諒,高城慶泰,廣村信,林麻利亜,野坂和人,田鶴谷(村山)惠 子	
11.ユーグレナのチアミ ン生合成経路とチア ミンリン酸合成酵素 について.	共	2019年11月 16日	第458回ビタミンB 研究協議会,東京	林麻利亜,石川孝博,野坂和人	
12. 歯学部における国家 試験の変遷から見え てくる薬剤師国家試 験の今後 一禁忌肢問 題の導入後の変化一	共	2019年08月24日	第4回日本薬学教育 学会大会,大阪	北村友也,野坂和人	
13. 習熟度別講義対象者 における甘えと先延 ばしの傾向	共	2019年08月 24日	第4回日本薬学教育 学会大会,大阪	安井菜穂美, 三浦健, 中林利克, 野坂和人	
14.1年前期開講科目にお ける強化教育対象学 生選別法の開発と評 価	共	2019年08月24日	第4回日本薬学教育 学会大会,大阪	西村奏咲,北村友也,野坂和人	
15. ピロリ菌のチアミン 輸送タンパク質PnuT の生化学的性質と基 質認識部位	共	2019年06月 08日	日本ビタミン学会 第71回大会,鳥取	野坂和人, 内山良介, 林麻利亜, 遠藤祐里奈, 只野響, 小林数也, 赤路健一	
16.Fasシグナルを介した 炎症応答メカニズム の解析	共	2019年03月 23日	日本薬学会第139年 会,千葉	内山良介, 筒井ひろ子, 林麻利亜, 遠藤祐里奈, 中村友香, 花島有 紗, 川瀬史恵, 田辺凌子, 田村友紀, 田所真貴子, 野坂和人	

研究業績等に関する事項					
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は	発行所、発表雑誌等	概要	
2. 学会発表	共有青別	発表の年月	又は学会等の名称		
17.ユーグレナにおける	共	2019年03月	日本薬学会第139年	林麻利亜,森本奈々,遠藤祐里奈,内山良介,石川孝博,野坂和人	
チアミンピロホスホ		22日	会,千葉	,	
キナーゼcDNAの単離			2, 12		
と発現					
18. ピロリ菌の高親和性	共	2019年03月	第455回ビタミンB	 野坂和人、只野響、内山良介	
チアミン輸送タンパ	,	09日	研究協議会,富山		
ク質PnuTについて					
19. ユーグレナにおける	共	2018年06月	日本ビタミン学会	松澤武,米澤佳則,林麻利亜,野坂和人,山田和子,田鶴谷(村山)	
ビタミンB6の窒素の		22日	第70回大会,高槻	惠子	
起源					
20. ピロリ菌のチアミン	共	2018年03月	日本薬学会第138年	只野響, 内山良介, 小林数也, 林麻利亜, 遠藤祐里奈, 赤路健一,	
輸送タンパク質PnuT		26日	会, 金沢	野坂和人	
の生化学的性質と基					
質認識部位					
21.ユーグレナのチアミ	共	2018年03月	日本薬学会第138年	林麻利亜,安江奏子,遠藤祐里奈,内山良介,石川孝博,野坂和人	
ン生合成酵素群cDNA		26日	会, 金沢		
の単離と発現					
22.Fasシグナルを介した	共	2018年03月	日本薬学会第138年	内山良介,林麻利亜,遠藤祐里奈,田辺凌子,田村友紀,田所真貴	
新規炎症応答メカニ		26日	会, 金沢	子,野坂和人	
ズムと生体における					
役割					
23. 非活性部位に変異が	共	2018年03月	第451回ビタミンB	野坂和人、門脇侑子	
認められたチアミン		10日	研究協議会,京都		
ピロホスホキナーゼ					
欠損症					
24. 習熟度別講義におけ	共	2017年09月	第2回日本薬学教育	三浦健,中林利克,野坂和人,水野英哉,安井菜穂美,安東由則,	
る成績の伸びに対す		02日	学会大会, 名古屋	三木知博	
る性格因子の影響の					
比較分析	11.	0015 500 5	D 1. # 24 A # 105 F		
25. ピロリ菌のチアミン	共	2017年03月	日本薬学会第137年	野坂和人,林麻利亜,遠藤祐里奈,内山良介,三室仁美	
要求性とチアミンピ		27日	会, 仙台		
ロリン酸オペロンの 同定					
PDE 26. 初年次生物学におけ	共	2017年03月	日本薬学会第137年	 三浦健,中林利克,野坂和人,水野英哉,安井菜穂美,三木知博	
る成績の伸びに関す	共	25日	会,仙台	二曲使,中体创光,封纵相八,小封夹成,女开来燃美,二个和诗	
る主要5因子性格検査		25 [云,1四口		
からのアプローチ					
27. ピロリ菌のチアミン	共	2017年03月	第447回ビタミンB	 野坂和人,内山良介,三室仁美	
輸送系の性質		04日	研究協議会,大阪	3/2/11/7, 13/11/7, 12/12/7	
28. Biosynthesis of	共	2016年09月	The Fifth	Hayashi M, Kobayashi K, Shimizu Y, Endou Y, Konno H, Akaji	
thiamin phosphate		07日	International	K. Nosaka K	
in			Conference on	.,	
hyperthermophilic			Cofactors and		
archaeon			Active Enzyme		
Pyrobaculum			Molecule 2016,		
calidifontis			Unazuiki		
29.古細菌Pyrobaculum	共	2016年03月	日本薬学会第136年	林麻利亜,野坂和人	
calidifontisのチア		29日	会,横浜		
ミンリン酸キナーゼ					
の酵素学的性質と反					
応機構					
30.酵母におけるチアミ	共	2016年03月	日本薬学会第136年	林麻利亜,清水泰博,山田和子,田鶴谷惠子,野坂和人	
ン・チアゾール部の		29日	会,横浜		
嫌気条件下での生合					
成					
31.ピロリ菌のチアミン	共	2016年01月	第443回ビタミンB	野坂和人,内山良介	
要求性とチアミン輸		30日	研究協議会, 京都		
送系について	l				
32. Palladium on	共	2015年12月	The 2015	Esaki H, Hattori T, Tsubone A, Sawama Y, Monguchi Y, Nosaka	

研究業績等に関する事項					
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要	
2.学会発表	共有盲別	光衣の平月	人は子云寺の石林		
spherical carbon (Pd/SC) as a catalyst for chemoselective hydrogenation		15日	International Chemical Congress of Pacific Basin Societies, Honolulu	K, Fukushima K, Sajiki H	
33. Synthesis and structure activity relationship study of BK-1097 analogues toward simple antifungal agents	共	2015年11月16日	第52回ペプチド討論会,平塚	Chida S, Abumi K, Sasaki Y, Yano S, Nosaka K, Konno H	
34. Synthesis and evaluation of retro-inverso- modified HTLV-1 protease inhibitor.	共	2015年11月 16日	第52回ペプチド討 論会, 平塚	Awahara C, Tatsumi T, Furuta S, Shinjoh G, Konno H, Nosaka K, Kobayashi K, Hattori Y, Akaji K	
35. 古細菌Pyrobaculum calidifontisのチアミンリン酸キナーゼThiLの酵素学的性質	共	2015年06月06日	日本ビタミン学会 第67回大会, 奈良	林麻利亜,野坂和人	
36. 不均一系パラジウム 触媒膜による鈴木-宮 浦反応の開発	共	2015年03月 28日	日本薬学会第135年 会,神戸	江嵜啓祥,澤春夫,野坂和人,福島和明,澤間善成,門口泰也,佐 治木弘尚	
37. 古細菌のチアミンピロリン酸生成経路とチアミンリン酸キナーゼの酵素学的性質	共	2015年02月07日	第439回ビタミンB 研究協議会,東京	林麻利亜,野坂和人	
38. 高度好塩菌 Halobacterium salinarumにおけるチアミン・ピリミジン 部の生合成経路	共	2014年12月07日	第31回日本薬学会 九州支部大会,福 岡	古賀小百合,狭間淳輔,林麻利亜,木島由希絵,山田和子,野坂和人,田鶴谷(村山)惠子	
39. チアミンリン酸合成 酵素 thiN の酵素学 的性質と立体構造モ デリング	共	2014年10月	第64回日本薬学会 近畿支部大会,京 都	林麻利亜,小林数也,今野博行,赤路健一,山田和子,野坂和人	
40. レトロインベルソ型 HTLV-1プロテアーゼ 阻害剤の合成と構造 活性相関研究	共	2014年10月11日	第64回日本薬学会 近畿支部大会,京 都	古田早紀,粟原千如,辰巳正,新城源,今野博行,野坂和人,小林数也,服部恭尚,照屋健太,赤路健一	
41. Highly chemoselective hydrogenation method using Pd on spherical carbon	共	2014年08月12日	248th ACS National Meeting, San Francisco	Esaki H, Hattori T, Tsubone A, Mibayashi S, Sakata T, Sawama Y, Monguchi Y, Yasuda H, Nosaka K, Sajiki H	
42. 新規パラジウム触媒 を用いた官能基選択 的接触還元反応の開 発	共	2014年08月 01日	日本プロセス化学 会 2014サマーシ ンポジウム,東京	江嵜啓祥,服部倫弘,坪根綾,三林聡子,坂田孝夫,澤間善成,門 口泰也,保田英洋,野坂和人,佐治木弘尚	
43. 球状成形活性炭担持 型パラジウムを触媒 とした官能基選択的 接触還元反応の開発	共	2013年11月 05日	第39回反応と合成 の進歩シンポジウ ム,福岡	江嵜啓祥,服部倫弘,坪根綾,三林聡子,坂田孝夫,澤間善成,門 口泰也,保田英洋,野坂和人,佐治木弘尚	
44.チアミンリン酸合成 酵素thiNの酵素学的	共	2013年11月 02日	第434回ビタミンB 研究協議会,名古	林麻利亜,小林数也,赤路健一,田鶴谷(村山)惠子,山田和子,野 坂和人	

研究業績等に関する事項					
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要	
2. 学会発表					
性質と立体構造モデ リング			屋		
45.ユーグレナにおける ビタミンB1, B6の生 合成経路	共	2013年09月06日	日本農芸化学会関 西・中四国・西日 本支部および日本 ビタミン学会近 畿・中国四国・九 州沖縄地区 2013 年度合同大会,広 島,	林麻利亜,田鶴谷(村山)惠子,野坂和人,山田和子	
46. 超好熱性古細菌のチ アミンリン酸合成酵 素thiNについて	共	2013年05月17日	日本ビタミン学会 第65回大会,東京	林麻利亜,野坂和人,小林数也,赤路健一,田鶴谷惠子,山田和子	
47. 超好熱性古細菌にお けるチアミン生合成 経路の研究	共	2013年03月 30日	日本薬学会第133年 会,横浜	林麻利亜,野坂和人,田鶴谷惠子,山田和子	
48. 超好熱性古細菌のチ アミンリン酸合成酵 素thiNについて	共	2013年02月02日	第431回ビタミンB 研究協議会,大阪	野坂和人,林麻利亜,田鶴谷(村山)惠子,山田和子	
49. 球状活性炭担持型パ ラジウム触媒による 官能基選択的接触還 元反応の開発	共	2012年03月31日	日本薬学会第132年 会,札幌	江嵜啓祥,門口泰也,野坂和人,佐治木弘尚	
50. ユーグレナにおける チアミン生合成経路 の研究	共	2012年03月29日	日本薬学会第132年 会,札幌	林麻利亜,中村幸惠,村上真愛,田鶴谷惠子,野坂和人,山田和子	
51.Callipeltin E の固 相全合成	共	2012年03月 22日	日本農芸化学会 2012年度大会,京 都	菊池真理,野坂和人,赤路健一,今野博行	
52. 抗真菌活性を有する Bk-1229 の β- hydroxyTyr 部位の立 体化学と合成に関す る研究	共	2012年03月222日	日本農芸化学会 2012年度大会,京 都	生駒恵,大槻雄介,野坂和人,今野博行	
53. Facilitated recruitment of Pdc2, a yeast transcriptional activator, in response to thiamin starvation.	共	2011年12月15日	第34会日本分子生物学会年会,横浜	野坂和人,江嵜啓祥,小野塚真理,今野博行,服部恭尚,赤路健一	
54. 酵母のチアミン依存 性転写因子Pdc2の標 的配列	単	2011年11月 05日	第426回ビタミンB 研究協議会,大津		
55.環状リポペプチド Bk-1229 類似体の合 成と抗真菌活性	共	2011年10月 08日	日本農芸化学会東 北支部第146 回大 会,山形	今野博行,大槻雄介,松崎健太,生駒 恵,野坂和人	
56.環状リポペプチド Burkholdine類誘導体 の合成と抗真菌活性	共	2011年09月27日	第48回ペプチド討 論会,札幌	今野博行,大槻雄介,松崎健太,生駒 恵,野坂和人	
57.Chemoselective Hydrogenation Using Pd on Spherical Carbon.	共	2011年08月	2nd International Symposium on Process Chemistry, Kyoto	Esaki H, Sawama Y, Monguchi Y, Nosaka K, Sajiki H	
58.酵母のチアミン依存 性転写因子Pdc2の DNA結合活性	単	2011年02月 05日	第423回ビタミンB 研究協議会,東京		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
59.Synthetic Study of Callipeltin A, an Anti-HIV Cyclic Depsipeptide	共	2010年12月 08日	5th International Peptide Symposium, Kyoto	Konno H, Kikuchi M, Maita K, Takatsuka Y, Nosaka K, Akaji K
Isolated from Marine Sponge.				
60. Synthesis and Evaluation of Small Peptide Inhibitors for SARS 3CL Protease.	共	08日	5th International Peptide Symposium, Kyoto	Konno H, Ishii M, Maita K, Hattori Y, Nosaka K, Akaji K
61. 抗HIV 活性を有する 環状デプシペプチド 類の全合成研究: β - MeOTyr, β-MeOThr およびアミノジオー ル誘導体の合成研究	共	2010年09月27日	日本農芸化学会東 北支部第145 回大 会, 仙台	今野博行,米田翔,菊池真理,野坂和人,赤路健一
62. 構造解析に基づく SARS 3CL Protease 阻害剤の設計とその 阻害能評価	共	2010年09月 27日	日本農芸化学会東 北支部第145 回大 会,仙台	今野博行,石井学,野坂和人,服部恭尚,赤路健一
63. 脱リン酸化酵素 Wipl の選択的阻害剤 の合成研究	共	2010年06月 12日	日本薬学会第130年 会,岡山	服部恭尚, 林良, Ettore Appella, 野坂和人, 赤路健一
64. 酵母のチアミン依存 性転写因子Pdc2の機 能領域解析	共	2010年06月 12日	日本ビタミン学会 第62回大会,盛岡	野坂和人,小野塚真理,今野博行,服部恭尚,赤路健一
65. SARS 3CL プロテアー ゼ阻害剤創成を目指 したペプチドアルデ ヒドの合成と阻害能 評価	共	2010年03月27日	日本農芸化学会 2010年度大会,東 京	今野博行,石井学,服部恭尚,野坂和人,赤路健一
66. 構造解析に基づくペ プチドアルデヒド型 SARS 3CLプロテアー ゼ阻害剤の合成と評 価	共	2009年11月16日	第35回反応と合成 の進歩シンポジウ ム,金沢	今野博行,野坂和人,小野塚真理,三井寛典,赤路健一,楠木正 巳,尾崎健,三城明
67. 置換基導入可能なハ イドロキシエチルア ミン骨格の合成とペ プチドへの導入	共	2009年11月 04日	第46回ペプチド討 論会,北九州	出口綾香,服部恭尚,今野博行,野坂和人,赤路健一
68. 固相法によるペプチ ドアルデヒド類の実 践的合成法の検討	共	2009年11月 04日	第46回ペプチド討 論会,北九州	今野博行,石井学,服部恭尚,野坂和人,赤路健一
69. Design of small molecular inhibitor for SARS 3CL protease besed on structure analysis	共	2009年11月 04日	第46回ペプチド討 論会,北九州	Akaji K, Nosaka K, Hattori Y, Mitsui H, Konno H, Kusunoki M, Ozaki T, Sanjo A
70.酵母の転写因子PDC2 のチアミン依存的転 写制御機構 71.Synthetic Studies on Callipeltins B	単共	2009年05月 29日 2009年04月 03日	ビタミンB研究委 員会第416回研究協 議会, 亀岡 BIT' 2nd Annual Protein and	Konno H, Nosaka K, Akaji K
and E Isolated from Marine Sponge		30 H	Peptide Conference (PepCon 2009),	

研究業績等に関する事項					
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要	
2. 学会発表	1	ı	T		
			Seoul, South Korea, 2009		
72.環状デプシペプチド Callipeltin Bの固相 全合成研究	共	2009年03月27日	日本薬学会第129年 会,京都	今野博行,野坂和人,赤路健一	
73. 側鎖対応置換基をも つハイドロキシエチ ルアミン骨格の合成 とペプチド配列への 導入	共	2009年03月27日	日本薬学会第129年 会,京都	出口綾香,今野博行,野坂和人,赤路健一	
74. SARS 3CLプロテアー ゼ阻害に必要なチ オール反応性官能基 の評価	共	2009年03月27日	日本薬学会第129年 会,京都	三井寬法,高橋麻矢子,今野博行,野坂和人,赤路健一	
75. 酵母転写因子Pdc2pの チアミン依存性転写 活性化機構	共	2008年12月09日	第31会日本分子生物学会-第81会日本生化学会合同大会,神戸	野坂和人,小野塚真理,今野博行,赤路健一	
76. レトロインベルソペ プチド型HTLV-1プロ テアーゼ阻害剤の合 成と構造活性相関	共	2008年11月 04日	第34回反応と合成 の進歩シンポジウ ム,京都	粟原千如,辰巳正,今野博行,野坂和人,赤路健一	
77. Synthetic studies on callipeltins B and E isolated from marine sponge	共	2008年10月31日	第45回ペプチド討 論会,東京	今野博行,野坂和人,赤路健一	
78. Syntheses and Evaluations of Peptide based Inhibitors for R188I Mutant of SARS 3CL protease	共	2008年10月29日	第45回ペプチド討 論会,東京	三井寬法,高橋真矢子,今野博行,野坂和人,赤路健一	
79. 転写因子Pdc2pのチア ミン依存性転写活性 化機構 80. 酵母の多機能酵素	共	2008年09月 12日 2008年06月	酵母遺伝学フォー ラム第41回研究報 告会,札幌 ビタミンB研究委	野坂和人,小野塚真理,今野博行,赤路健一	
THI20が持つチアミ ナーゼII活性の生理 的役割	牛	12日	員会第412回研究協 議会,仙台		
81.ミトコンドリア Complex Iを阻害する アセトゲニンcis- solamin-Aの合成と阻 害能に関する研究	共	29日	日本薬学会第128年会,横浜	今野博行,奥野康弘,真壁秀文,野坂和人,赤路健一	
82.レトロインベルソペ プチド型HTLV-1プロ テアーゼ阻害剤の合 成	共	2008年03月29日	日本薬学会第128年 会,横浜	粟原千如,辰巳正,今野博行,野坂和人,赤路健一	
83.変異型 SARS3CLproteaseを用 いた新規アルデヒド 型阻害剤の評価	共	2008年03月29日	日本薬学会第128年 会,横浜	高橋麻矢子,野坂和人,今野博行,赤路健一	
84. 出芽酵母チアミナー ゼIIのチアミンサル ベージ合成への関与	共	2007年12月11日	第30会日本分子生 物学会-第80会日本 生化学会合同大 会, 横浜	小野塚真理,今野博行,川崎祐子,赤路健一,西村洋,野坂和人	
85. レトロインベルソペ プチド型HTLV-1プロ テアーゼ阻害剤の合	共	2007年11月27日	メディシナルケミ ストリーシンポジ ウム,相模原	辰巳正,粟原千如,仲裕美,相本三郎,今野博行,野坂和人,赤路 健一	

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
成と構造活性相関				
86. 酵母のチアミンピロ	単	2007年11月	ビタミンB研究委	
リン酸シグナルによ		17日	員会第410回研究協	
る発現制御機構			議会,京都	
87. Evaluation of	共	2007年11月	第44回ペプチド討	赤路健一,今野博行,小野塚真理,齋藤裕行,牧野歩,野坂和人
Peptide-based Inhibitors using R188I mutant of		09日	論会, 富山	
SARS 3CL Protease as a Proteolysis- resistant Mutant				
88.Synthesis and	共	2007年11月	第44回ペプチド討	今野博行,久保佳奈子,真壁秀文,野坂和人,赤路健一
Structure Activity Relationship Studies of Miraziridine A, a cysteine Protease		07日	論会,富山	
Inhibitor				
89.Miraziridine Aの全 合成ならびに Cathepsin Bに対する	共	2007年11月 05日	第33回反応と合成 の進歩シンポジウ ム,長崎	今野博行,久保佳奈子,真壁秀文,野坂和人,赤路健一
阻害部位の決定	11.	9007年10日	441	Wanna H. Walta W. Malacka H. Manaka W. Alacki W.
90.Total Synthesis of Miraziridine A and Its Analogues	共	2007年10月21日	4th International Peptides Sympodium, Cairns,	Konno H, Kubo K, Makabe H, Nosaka K, Akaji K
			Australia	
91. 出芽酵母の多機能酵素THI20が持つチアミナーゼII活性の生理	共	2007年05月 24日	日本ビタミン学会 第59回大会,佐世 保	野坂和人,小野塚真理,今野博行,川崎祐子,赤路健一
機能 92.allipeltin Aの全合 成研究: 異常アミノ 酸, β-Methoxy	共	2006年12月05日	第32回反応と合成 の進歩シンポジウ ム,広島	今野博行,青山幸代,野坂和人,赤路健一
Tyrosine および3,4 -Dimethyl Glutamineの不斉合成 と絶対配置の決定				
93.Synthetic Studies on Miraziridine A,	共	2006年11月27日	第43回ペプチド討 論会, 横浜	今野博行,久保佳奈子,真壁秀文,野坂和人,赤路健一
a cysteine protease inhibitor from marine sponge Theonella				
aff. mirabilis	++	2006 5 11 5	時ない、ぴつらむい	人服婦仁 服仁如 土切神 古晓子本
94.ミトコンドリア内膜 に存在するComplex Iを阻害するアセトゲ ニン類の合成と阻害	共	2006年11月 21日	膜シンポジウム, 京都	今野博行,野坂和人,赤路健一,真壁秀文
能に関する研究 95.Synthetic Studies of Miraziridine A, a Cysteine Protease Inhibitor	共	2006年11月 05日	International Conference of 43rd Japanese Peptide	Konno H, Kubo K, Makabe H, Nosaka K, Akaji K
Isolated from			Symposium and	
Theonella aff.			4th Peptide	
mirabilis			Engineering Meeting,	

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表			Valvaham -	
96.Synthetic Study of Miraziridine A	共	2006年07月 23日	Yokohama International Conference on Biodiversity and Natural Products, Kyoto	Konno H, Nosaka K, Akaji K
97. 転写制御因子Pdc2pの チアミン調節系への 関与	共	2006年07月 15日	酵母遺伝学フォー ラム第39 回研究報 告会,三島	野坂和人,小野塚真理,今野博行,赤路健一
98. Characterization of the regulatory factor Pdc2p in yeast thiamin metabolism	共	2006年06月21日	20th IUBMB International Congress of Biochemistry and Molecular Biology and the 11th FAOBMB	Onozuka M, Kawasaki Y, Konno H, Akaji K, Nishino H, Nosaka K
99. 酵母チアミン調節系 における転写調節因 子Pdc2pの機能解析	共	2006年05月	Congress, Kyoto 日本ビタミン学会 第58回大会, 徳島	小野塚真理,川崎祐子,今野博行,赤路健一,西野輔翼,野坂和人
100.システインプロテ アーゼ阻害剤 tokaramide Aの合成 と阻害活性評価	共	2006年03月 28日	日本薬学会第126年 会,仙台	今野博行,野坂和人,赤路健一
101.システインプロテ アーゼ阻害剤 Miraziridine Aの合 成研究	共	2006年03月26日	日本農芸化学会 2006年度大会,京 都	今野博行,久保佳奈子,真壁秀文,野坂和人
102.Yeast Genetic Regulation Mediated by Thiamin Pyrophosphate- binding Motif	共	2005年11月10日	International Interdisciplinar y Conference on Vitamins, Coenzymes, Biofactors Comprising the 4th International Symposium on VitaminB6, PQQ, Carbonyl Catalysis and Quinoproteins and the 4th International Congress on Vitamins and Related Biofactors, Awaji	Nosaka K, Onozuka M, Kawasaki Y, Konno H, Akaji K
103.Yeast Gene Family Involved in Biosynthesis of Hydroxymethylpyrim idine Pyrophosphate	共	2005年11月08日	Awaji International Interdisciplinar y Conference on Vitamins, Coenzymes, Biofactors Comprising the 4th International Symposium on	Kawasaki Y, Onozuka M, Mizote T, Nosaka K

研究業績等に関する事項					
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要	
2. 学会発表	<u> </u>				
104. Expression Analysis of Human Thiamin Pyrophosphokinase Gene	共	2005年11月08日	VitaminB6, PQQ, Carbonyl Catalysis and Quinoproteins and the 4th International Congress on Vitamins and Related Biofactors, Awaji, International Interdisciplinar y Conference on Vitamins, Coenzymes, Biofactors Comprising the 4th International Symposium on VitaminB6, PQQ, Carbonyl Catalysis and Quinoproteins and the 4th International Congress on Vitamins and Related Biofactors,	Onozuka M, Konno H, Akaji K, Nishino H, Nosaka K	
105.システインプロテ アーゼ阻害剤, tokaramide Aおよび miraziridine Aの合 成研究	共	2005年11月 07日	Awaji 第31回反応と合成 の進歩シンポジウ ム,神戸	今野博行,久保佳奈子,真壁秀文,藤井信孝,野坂和人,赤路健一	
106. Synthetic Studies of Tokaramide A and Miraziridine A Isolated from Marine Sponge Theonella aff. mirabilis	共	2005年08月27日	第42回ペプチド討 論会,豊中	今野博行,久保佳奈子,真壁秀文,藤井信孝,野坂和人	
107. Genetic Regulation Mediated by Thiamin Pyrophosphate- binding Motif in Saccharomyces cerevisiae	共	2005年08月08日	Cell signaling and stress responses workshop in XXIInd International Conference on Yeast Genetics & Molecular Biology, Bratislava, Slovak	Nosaka K, Onozuka M, Kawasaki Y, Konno H, Akaji K	
108. ヒトチアミンピロホ スホキナーゼ遺伝子 5'上流領域の機能解	共	2005年05月 26日	日本ビタミン学会 第57回大会,志摩	小野塚真理,今野博行,赤路健一,西野輔翼,野坂和人	

研究業績等に関する事項					
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要	
2. 学会発表					
析 109.非直結型Bis-THFアセ トゲニン Bullatanocinアナロ グの合成とミトコン ドリアComplex Iの阻	共	2005年03月30日	日本薬学会第125年 会,東京	今野博行,野坂和人,赤路健一,藤井信孝,三芳秀人,真壁秀文	
害活性評価 110. 非直結型ビステトラ ヒドロフランアセト ゲニンアナログの合 成とミトコンドリア コンプレックスIの阻 害活性評価	共	2005年03月27日	日本化学会第85春 季年会,横浜	今野博行,野坂和人,赤路健一,真壁秀文,三芳秀人	
111.酵母のチアミンピロリン酸シグナルによる転写調節解析	共	2004年12月 08日	第27回日本分子生物学会年会. 神戸	野坂和人,小野塚真理,西村洋,佐野護	
112. Molecular Characterization of the 5- Regulatory Region of Human Thiamin Pyrophosphokinase Gene	共	2004年10月15日	第77回日本生化学 会大会,横浜	Onozuka M, Nosaka K	
113. 酵母のチアミンピロ リン酸シグナルに関 与するタンパク質 Thi3pの機能解析	共	2004年05月 28日	日本ビタミン学会 第56回大会,長岡	野坂和人,小野塚真理,西村洋	
114. Signal Transduction Mediated by Thiamin Pyrophosphate- binding Motif in Saccharomyces cerevisiae	共	2003年10月17日	第76回日本生化学 会大会,横浜	Nosaka K, Onozuka M, Nishimura H	
115. ヒトチアミンピロホ スホキナーゼの酵素 学的性質と活性部位 残基の検討	共	2002年04月 25日	日本ビタミン学会 第54回大会,東京	小野塚真理,西野輔翼,野坂和人	
116.Association of Nucleoside Diphosphate Kinase nm23-H2 with Human Telomere	共	2001年11月06日	The Fourth International Congress of the Genetics, Biochemistry and Physiology of NDP Kinase/Nm23/ Awd, Tokyo	Nosaka K, Onozuka M, Masuda M, Kawahara M	
117.酵母のチアミン生合 成遺伝子THI20, THI21の機能解析	共	2001年05月 25日	日本ビタミン学会第53回大会,淡路	川崎祐子,小野塚真理,溝手朝子,野坂和人	
118.NOにより誘発された マウス皮膚腫瘍にお けるH-ras変異	共	2000年12月 13日	第23回日本分子生 物学会年会,神戸	里見佳子, Ping Bu, 小野塚真理, 野坂和人, 信国好俊, 奥田正人, 徳田春邦, 西野輔翼	
119.ヒトチアミンピロホ スホキナーゼのcDNA 単離と酵素学的性質	共	2000年10月 14日	第73回日本生化学 会大会,横浜	小野塚真理,西野輔翼,野坂和人	
120. ヒトチアミンピロホ スホキナーゼcDNAの 単離,発現およびゲ	共	2000年08月 28日	第377回ビタミンB 研究協議会,長 岡.	野坂和人,小野塚真理,西野輔翼	

研究業績等に関する事項					
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要	
2. 学会発表		I	I		
ノム構造 121.ヒトチアミンピロホ スホキナーゼcDNAの 単離および発現様式 について	共	2000年05月20日	日本ビタミン学会 第52回大会, 岡山	野坂和人,小野塚真理,西野輔翼,嘉数直樹,阿部達生,日比成美	
122. マウスチアミンピロ ホスホキナーゼcDNA の単離および発現解 析	共	1999年10月 08日	第72回日本生化学 会大会,横浜	野坂和人,小野塚真理,西野輔翼,西村洋,上山久雄,川崎祐子	
123. Positional Cloning of the TRMA Gene.	共	1999年08月 07日	The Fifth International Workshop on Human Chromosome 1, Cambridge, England	Labay V, Baron D, Raz T, Mandel H, Williams H, Barrett T, Szargel R, McDonald L, Shalata A, Nosaka K, Gregory S, Cohen N	
124. 酵母のチアミン生合 成に関与する新たな 遺伝子の機能解析	共	1999年06月 03日	日本ビタミン学会 第51回大会,静岡	川崎祐子,小野塚真理,西村洋,野坂和人	
125.マウスチアミンピロ ホスホキナーゼcDNA のクローニング	共	1999年06月	日本ビタミン学会 第51回大会,静岡	野坂和人,小野塚真理,西野輔翼,西村洋,上山久雄	
126. Evidence for Genetic Homogeneity, and Refined Mapping of the Gene for Thiamin-responsive Megaloblastic Anemia	共	1998年06月 26日	The Fourth International Workshop on Human Chromosome 1, Cambridge, England	Raz T, Barrett T, Szargel R, Mandel H, Neufeld EJ, Nosaka K, Viana MB, Cohen N	
127.Gliomaにおける異常 EGFR発現と apoptosisとの関係に ついて	共	1997年12月 16日	第20回日本分子生物学会年会,京都	須川典亮,山本和明,上田聖,森田規之,野坂和人,西野輔翼,喜 多正和	
128.NDPキナーゼ (nm23- H2) のヒトテロメア への関与	共	1997年12月 16日	第20回日本分子生 物学会年会,京都	野坂和人,増田光治,河原真大,山西清文,原英二,里見佳子,西野輔翼	
129. テロメア結合蛋白質 TRF1とNDPキナーゼ (nm23-H2) の相互作 用	共	1997年09月 23日	第70回日本生化学 会大会,金沢	野坂和人,河原真大,里見佳子,西野輔翼	
130. チアミン反応性貧血 症候群における糖尿 病の病因解明のため の基礎的研究	共	1997年05月 08日	日本ビタミン学会 第49回大会,徳 島,	小坂喜太郎,衣笠昭彦,野坂和人,西村洋,西野輔翼,森本哲	
131.酵母Saccharomyces cerevisiaeのチアミ ン輸送系遺伝子につ いて	共	1997年05月08日	日本ビタミン学会 第49回大会,徳島	圓城文雄, 西村洋, 野坂和人, 緒方正和, 岩島昭夫, 西野輔翼	
132.異常EGFR発現 glioblastoma cell lineを利用した glioblastoma特性の 解析	共	1997年04月 04日	第15回日本脳腫瘍 病理学会,佐賀	須川典亮,山本和明,上田聖,森田規之,喜多正和,野坂和人,西 野輔翼	
133.酵母Saccharomyces cerevisiaeのチアミ ン輸送系遺伝子	共	1996年12月 07日	第29回酵母遺伝学 フォーラム,熊本	圓城文雄,西村洋,野坂和人,緒方正和,岩島昭夫	
THI10の単離と解析 134. 出芽酵母のチアミン 輸送系遺伝子の解析	共	1995年09月 16日	第68回日本生化学 会大会,仙台	圓城文雄,西村洋,野坂和人,緒方正和,岩島昭夫	

研究業績等に関する事項					
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要	
2. 学会発表	T	T .	1	T	
135.酵母Saccharomyces	共	1995年06月	日本ビタミン学会	圓城文雄,西村洋,野坂和人,緒方正和,岩島昭夫	
cerevisiaeのチアミ		09日	第47回大会,盛岡		
ン輸送系遺伝子の解					
析					
136.Characterization	共	1995年02月	2nd	Nosaka K, Nishimura H, Kaneko Y, Kawasaki Y, Iwashima A	
of Genes Encoding		16日	International		
for Enzymes			Congress on		
Involved in			Vitamins and		
Thiamin			Biofactors in		
Pyrophosphate			Life Science,		
Synthesis in Yeast			San Diego, USA		
137.Two Positive	共	1995年02月	2nd	Nishimura H, Kaneko Y, Nosaka K, Kawasaki Y, Iwashima A	
Regulatory		16日	International		
Factors, Thi2p and			Congress on		
Thi3p, of Thiamin			Vitamins and		
Metabolism in			Biofactors in		
Saccharomyces			Life Science,		
cerevisiae			San Diego, USA		
138.酵母のチアミンピロ	共	1994年12月	第343回ビタミンB	岩島昭夫,野坂和人,西村洋,川崎祐子	
リン酸生合成酵素遺		03日	研究協議会, 京都		
伝子THI6および					
THI80の単離と性質					
139.酵母のチアミン生合	共	1994年09月	第67回日本生化学	野坂和人, 西村洋, 辻原隆是, 川崎祐子, 岩島昭夫	
成における2機能酵		10日	会大会,大阪		
素遺伝子(THI6)の単					
離と活性領域の検索					
140. 出芽酵母のチアミン	共	1994年09月	第67回日本生化学	西村洋,野坂和人,金子嘉信,岩島昭夫	
代謝系の正の調節遺		08日	会大会,大阪		
伝子THI2について					
141.酵母のチアミン生合	共	1994年08月	第27回酵母遺伝学	西村洋,野坂和人,金子嘉信,岩島昭夫	
成系の正の調節遺伝		05日	集談会, 東京		
子THI2について					
142.酵母Saccharomyces	共	1994年06月	日本ビタミン学会	西村洋,野坂和人,金子嘉信,岩島昭夫	
cerevisiaeのチアミ		09日	第46回大会,神戸		
ン代謝系の正の調節					
因子THI2とTHI3につ					
いて					
143.酵母のチアミン生合	共	1994年06月	日本ビタミン学会	野坂和人, 西村洋, 岩島昭夫, 川崎祐子	
成における2機能酵素		09日	第46回大会,神戸		
遺伝子(THI6)のク					
ローニング					
144. ポリエチレングリ	共	1994年02月	第10回臨床フリー	平田勲,田中佐和子,芦原雅代,神林祐子,塚本茂,杉岡信幸,森	
コール誘導体付与に		05日	ラジカル会議,京	下満久,岸本英機,吉川敏一,内藤裕二,近藤元治,野坂和人	
よるリポソーム-SOD			都		
の長時間血中滞留性					
145. ポリエチレングリ	共	1994年01月	第15回日本病院薬	平田勲,田中佐和子,芦原雅代,神林祐子,塚本茂,杉岡信幸,森	
コール誘導体付与に		29日	剤師会近畿学術大	下満久,岸本英機,吉川敏一,内藤裕二,近藤元治,野坂和人	
よるリポソーム-SOD			会, 大阪		
の長時間血中滞留性					
146. 出芽酵母のチアミン	共	1993年12月	第16回日本分子生	野坂和人,金子嘉信,西村洋,岩島昭夫	
ピロホスホキナーゼ		19日	物学会年会,千葉		
遺伝子の単離と発現					
147.悪性gliomaに対する	共	1993年12月	第16回日本分子生	須川典亮,橋本直哉,島田憲二,伊林範裕,上田聖,西野輔翼,野	
EGFR antisense DNA		18日	物学会年会,千葉	坂和人,中川善雄	
によるgene therapy			.,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,		
の研究					
148. 酵母Saccharomyces	共	1993年12月	第16回日本分子生	西村洋,川崎祐子,野坂和人,金子嘉信,岩島昭夫	
cerevisiaeのチアミ		17日	物学会年会,千葉	THE PARTY OF THE P	
ン代謝系遺伝子の発			127 - 1 - 27 1 - 1 - 1		
~ LAM1/U/WZ IV 1 ^//E		l	!	<u> </u>	

研究業績等に関する事項					
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要	
2. 学会発表					
現に関与する調節遺 伝子THI3の単離と解 析					
149. 酵母TH180遺伝子のクローニングとその破壊による影響	共	1993年10月 03日	第66回日本生化学 会大会,東京	野坂和人,金子嘉信,西村洋,岩島昭夫 	
150.EGFR antisense DNA を用いたmalignant gliomaに対する遺伝 子療法の基礎的研究	共	1993年09月 22日	第52回日本脳神経 外科学会総会,東 京	須川典亮,橋本直哉,伊林範裕,上田聖,西野輔翼,野坂和人,中 川善雄,栗本昌紀,高久晃	
151.脳挫傷後における basic FGF mRNAの発 現	共	1993年09月 20日	第52回日本脳神経 外科学会総会,東 京	岩本芳浩,須川典亮,山木垂水,村上陳訓,吉野英二,上田聖,野坂和人,西野輔翼	
152.Expression of bFGF mRNA after Cerebral Contusion	共	1993年09月09日	3rd Annual Conference of the International Association for the Study of Traumatic Brain Injury, Tokyo	Iwamoto Y, Sugawa N, Yamaki T, Murakami N, Ueda S, Yoshino E, Nosaka K, Nishino H, Iwashima A, Kurokawa T	
153. 酵母Saccharomyces cerevisiaeのチアミ ン代謝系の調節遺伝 子THI3の解析	共	1993年07月 27日	第26回酵母遺伝学 集談会,広島	西村洋,川崎祐子,野坂和人,金子嘉信,岩島昭夫	
154.Expression of bFGF mRNA after Cerebral Contusion	共	1993年7月5 日	2nd International Neurotrauma Symposium, Glasgow, Scotland	Iwamoto Y, Sugawa N, Yamaki T, Murakami N, Yoshino E, Nakagawa Y, Ueda S, Nosaka K, Nishino H	
155. 酵母のチアミンピロホスホキナーゼ遺伝子のクローニング	共	1993年5月 27日	日本ビタミン学会 第45回大会, 岐阜	野坂和人,西村洋,岩島昭夫,金子嘉信	
156. グリオーマの悪性化 における分子生物学 的レベルでの研究及 治療への応用	共	1993年5月 10日	第11回日本脳腫瘍 病理研究会,東京	須川典亮,橋本直哉,伊林範裕,上田聖,野坂和人,西野輔翼, Collins V. P.	
157.酵母のCordycepin感 受性とThiamin輸送系	共	1992年12月 05日	第331回ビタミンB 研究協議会,京都	岩島昭夫,野坂和人,西村洋,川崎祐子	
158.酵母Saccharomyces cerevisieの cordycepin感受性に およぼすthiaminの影	共	1992年10月 11日	第65回日本生化学 会大会,福岡	岩島昭夫,野坂和人,西村洋,川崎祐子	
159.Regulation of Thiamin Metabolism in the Yeast Saccharomyces cerevisiae	共	1992年08月 25日	8th International Symposium on Yeasts, Atlanta, USA	Iwashima A, Nishimura H, Kawasaki Y, Nosaka K	
160.酵母Saccharomyces cerevisieのチアミン 代謝系の正の調節遺 伝子THI3について	共	1992年08月05日	第25回酵母遺伝学 集談会,京都	西村洋,川崎祐子,野坂和人,金子嘉信,岩島昭夫	
161.酵母Saccharomyces cerevisieにおけるチ アミン代謝系の正の 調節遺伝子TH13につ いて	共	1992年05月 29日	日本ビタミン学会 第44回大会, 仙台	西村洋,野坂和人,岩島昭夫,川崎祐子,金子嘉信	

研究業績等に関する事項						
著書、学術論文等の名称	単著・	発行又は	発行所、発表雑誌等	概要		
2. 学会発表	共著書別	発表の年月	又は学会等の名称			
162. 酵母のチアミン抑制	共	1991年12月	第14回日本分子生	野坂和人,山西清文,西村洋,岩島昭夫		
型酸性ホスファター		18日	物学会年会,福岡			
ゼ遺伝子PHO3の転写						
制御領域						
163.酵母のビタミンB1要	共	1991年10月	第324回ビタミンB	 岩島昭夫, 西村洋, 野坂和人, 川崎祐子		
求性変異株(thi3)の		12日	研究協議会, 静岡			
性質						
164. 酵母のチアミン生合	共	1991年10月	第64回日本生化学	西村洋,川崎祐子,野坂和人,金子嘉信,岩島昭夫		
成系の正の調節遺伝		03日	会大会, 東京			
子THI2 (PHO6)につい						
て						
165. 酵母のチアミン抑制	共	1991年10月	第64回日本生化学	野坂和人,山西清文,西村洋,岩島昭夫		
型酸性ホスファター		03日	会大会, 東京			
ゼ遺伝子の5'上流領						
域の解析						
166.Regulation of	共	1991年09月	lst	Nishimura H, Kawasaki Y, Nosaka K, Iwashima A		
Thiamin metabolism		19日	International			
in Yeast.			Congress on			
			Vitamins and			
			Biofactors in			
			Life Science,			
			Kobe			
167. 脳梗塞,眼振,網膜	共	1991年09月	第33回日本小児血	森本哲,木崎善郎,佐藤典子,小西清三郎,片岡季久,林玲二,井		
色素変性を合併した		19日	液学会, 京都	上文夫,衣笠昭彦,沢田淳,今宿晋作,野坂和人,西村洋,岩島昭		
ビタミンB1反応性貧				夫		
血症候群の一例						
168. Saccharomyces	共	1991年08月	第24回酵母遺伝学	西村洋,川崎祐子,野坂和人,金子嘉信,岩島昭夫		
cerevisieにおけるチ		09日	集談会,八王子			
アミン生合成系の調						
節						
169.酵母Saccharomyces	共	1991年05月	日本ビタミン学会	西村洋,野坂和人,岩島昭夫,川崎祐子		
cerevisieにおけるチ		30日	第43回大会,熊本			
アミン代謝系の抑制						
機構						
170.酵母におけるチアミ	共	1990年12月	第319回ビタミンB	岩島昭夫,川崎祐子,野坂和人,西村洋,金子嘉信		
ンピロリン酸の生合		01日	研究協議会,大阪			
成の調節						
171.酵母のチアミン輸送	共	1990年09月	第63回日本生化学	西村洋,川崎祐子,野坂和人,金子嘉信,岩島昭夫		
系の調節		13日	会大会,大阪			
172.酵母チアミンピロホ	共	1990年09月	第63回日本生化学	野坂和人,西村洋,川崎祐子,金子嘉信,岩島昭夫		
スホキナーゼの変異		13日	会大会,大阪			
株の性質						
173.酵母Saccharomyces	共	1990年05月	日本ビタミン学会	川崎祐子,西村洋,野坂和人,岩島昭夫,金子嘉信		
cerevisiaeにおける		18日	第42回大会,名古			
チアミン生合成の調			屋			
節			***************************************			
174. 酵母チアミン結合タ	共	1989年11月	第62回日本生化学	西村洋,野坂和人,川崎祐子,岩島昭夫		
ンパク質の性質と機		04日	会大会, 京都			
能	11.	1000	D-185-5-5 W-4			
175. 酵母形質膜画分のチ	共	1989年06月	日本ビタミン学会	西村洋,仙福健治,野坂和人,岩島昭夫,川崎祐子		
アミン結合タンパク		08日	第41回大会,札幌			
質について	11.	1000 200 2	口 十 1 2 5 7 2 7 2 7 7 7	殿[[1]] 工作济 用草西子		
176. 酵母のチアミン抑制	共	1989年06月	日本ビタミン学会	野坂和人,西村洋,岩島昭夫		
型酸性ホスファター		08日	第41回大会,札幌			
ゼの性質と機能	11.	1000 7 10 7	体ののではなっても			
177.酵母の可溶性チアミ	共	1988年10月	第306回ビタミンB	岩島昭夫,野坂和人,西村洋,金子嘉信		
ン結合タンパク質と		15日	研究協議会,名古			
チアミン抑制性酸性			屋			
ホスファターゼの同						

研究業績等に関する事項					
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要	
2. 学会発表					
一性について					
178. Identity of	共	1988年08月	7th	Iwashima A, Nosaka K, Nishimura H	
Soluble Thiamine-		04日	International		
Binding Protein			Symposium on		
with Thiamine-			Yeasts, Perugia,		
Repressible Acid			Italy		
Phosphatase in					
Saccharomyces					
cerevisiae					
179.酵母のチアミン抑制	共	1987年10月	第60回日本生化学	野坂和人,西村洋,岩島昭夫	
性分泌タンパク質に		15日	会大会, 金沢		
ついて					
180. 酵母のチアミンの細	共	1987年05月	日本ビタミン学会	西村洋,野坂和人,仙福健治,岩島昭夫	
胞膜透過系のブロモ		14日	第39回大会,久留		
アセチルチアミンに			米		
よる不活化	.,	100= 400 =			
181. ラットにおけるバル	共	1987年02月	第8回日本病院薬剤	杉岡信幸,岡田耕二,井原憲彦,野坂和人,水野政直	
プロ酸ナトリウムの		01日	師会近畿学術大		
直腸吸収 182. 酵母細胞膜のビタミ	++	1006年11日	会,奈良	以自四十 五十次 取托和 [
	共	1986年11月 29日	第295回ビタミンB	岩島昭夫,西村洋,野坂和人	
ンB1結合タンパク質 の性質		29日	研究協議会,大阪		
183.酵母の細胞膜チアミ	共	1986年09月	第59回日本生化学	 野坂和人,西村洋,仙福健治,岩島昭夫	
ン結合タンパク質に	共	20日	会大会,西宫	野	
ついて		201	云八云,四百		
184. Role of	共	1986年03月	XIth	Iwashima A, Nosaka K, Nishimura H, Kimura Y	
Hydroxyethylthiazo		20日	International	I Hadrima II, Hodaka II, Himara II, Himara I	
le Kinase in			Specialized		
Thiamine Synthesis			Symposium on		
and			Yeasts, Lisbon,		
Hydroxyethylthiazo			Portugal		
le Transport in					
Saccharomyces					
cerevisiae					
185.酵母のビタミンB1生	共	1985年11月	第289回ビタミンB	岩島昭夫,野坂和人,西村洋,木村祐子	
合成およびチアゾー		30日	研究協議会,名古		
ルの取り込みにおけ			屋		
るチアゾールキナー					
ゼの役割					
186.2-Amino-	共	1985年09月	第58回日本生化学	岩島昭夫,野坂和人,西村洋,木村祐子	
hydroxyethylthiazo		26日	会大会, 仙台		
le耐性酵母菌の性質					
187.Hydroxyethylthiazo	共	1985年05月	日本ビタミン学会	岩島昭夫,野坂和人,西村洋,木村祐子	
le kinase欠損酵母菌		09日	第37回大会,宝塚		
の分離					
188.酵母によるビタミン	共	1984年06月	第280回ビタミンB	岩島昭夫,野坂和人,木村祐子	
B1の分解		30日	研究協議会,東京		
3. 総説	774	00045115	18 h > > 00/11)	イフト)」とロエッエント ビの甘原ししゃ impelite / implified	
1. ウリジン 5'-三リン	単	2024年11月	ビタミン 98(11)	チアミンピロホスホキナーゼの基質として、ATPではなくUTPが優先 めに利用されており、UTPによってチマミンピロリン輸出は、ピルビ	
酸によるチアミンピ				的に利用されており、UTPによってチアミンピロリン酸生成、ピルビン酸的水素酸素活性、TCA回収、昨年40歳と昨年40歳と	
ロリン酸生成とピル ビン酸の酸化促進				ン酸脱水素酵素活性, TCA回路, 脂質生合成と脂肪細胞分化等が促進 されることを紹介した。p484-487	
(査読付)				されることを紹介した。p484-487 	
2.酸性微小環境がビタ	共	2022年12月	ビタミン 96(12)	 がん微小環境の酸性化が、ビタミン D 受容体(VDR)からSOX2シグ	
2. 酸性 (城 /) 環境 / * こ / S / 2 D 受容体-		12022十12万	C / \ / 00(14)	ナル伝達を介して、がん幹細胞の進展および悪性化に関与している	
SOX2 シグナルを介し				ことを紹介した。p529-532	
て 大腸がんの悪性化				山森元博,野坂和人	
を誘導する(査読				(共同研究につき本人担当分抽出不可能)	
付)				O 11 201 201 2 C 1 2 V 2 - 1 2 V 3 - 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	
147	1	<u> </u>	1		

研究業績等に関する事項					
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要	
3. 総説		lanas tira i			
3. リボフラビンはマクロファージのインフラマソーム依存的なカスパーゼ-1活性を阻害することで生体の炎症誘導を抑制する(香蒜付)	共	2022年3月	ビタミン 96(3)	リボフラビンが、生体の炎症応答に重要なインフラマソーム依存的なカスパーゼ-1活性を抑制することが報告されたことから、リボフラビンの新しい抗炎症メカニズムを紹介した。p86-89内山良介、野坂和人(共同研究につき本人担当分抽出不可能)	
4. 創薬ターゲットとしてのリボスイッチ・その開発の現状と展望・(査読付)	共	2022年2月	ビタミン 96(2)	病原性細菌のリボスイッチをターゲットとした創薬アプローチ方法 を紹介しつつ、創薬研究の現在までの道のりと今後の展望について 紹介した。p49-53 林麻利亜、佐野支帆子、野坂和人 (共同研究につき本人担当分抽出不可能)	
5. 腸内細菌叢に由来す る酪酸が宿主の骨形 成を促進する(査読 付)	共	2019年9月	ビタミン 93(9)	「共同研究にプラネ人担当が抽出不可能) プロバイオティクスとして用いられているLactobacillus rhamnosus GG株がマウス腸管内で酪酸を産生し、Treg細胞の分化を 介して骨形成を誘導するメカニズムについて紹介した。p404-407 内山良介、野坂和人 (共同研究につき本人担当分抽出不可能)	
6.マダニが媒介するラ イム病スピロヘータ はビタミンB1を必要 としない(査読付)	共	2018年6月	ビタミン 92(5,6)	ライム病の病原体であるスピロヘータBorrelia burgdorferiが、ビタミンBlを除いてもその増殖や生存が全く影響を受けず、ビタミンBlに依存しない代謝系を進化させていることを紹介した。pl28-130 野坂和人,内山良介	
7. 古細菌のチアミン生 合成経路の生化学的 研究(査読付)	共	2017年1月	ビタミン 91(1)	(共同研究につき本人担当分抽出不可能) 古細菌におけるチアミン生合成関連酵素について生化学的な解析を 行った。チアミンのチアゾール部は酵母型チアゾール合成酵素によ り合成され、ピリミジン部生合成経路は真正細菌や植物と同様の経 路であることを示唆した。また、ThiDNタンパク質のThiN領域が、既 知のチアミンリン酸合成酵素ThiEと全く同じ反応を触媒することを 明らかにし、ThiLタンパク質がチアミンリン酸キナーゼ活性を持つ ことを示した。p38-47 林麻利亜、田鶴谷(村山)恵子、野坂和人	
8.必須脂肪酸供給源と しての脂肪乳剤の最 近の動向(査読付)	共	2016年11月	ピタミン 90(11)	(共同研究につき本人担当分抽出不可能) 臨床で静脈栄養時に使用されている必須脂肪酸を含む脂肪乳剤の国 内外における動向について紹介した。p559-561 杉岡信幸,野坂和人 (共同研究につき本人担当分抽出不可能)	
9. ヒト大腸上皮細胞膜 に存在するチアミン ピロリン酸トランス ポーター(査読付)	共	2015年09月	ビタミン 89(9)	(共同研究にフさ本人担当が抽出不可能) ヒト大腸細胞膜には腸内細菌が生合成したチアミンピロリン酸をリン酸化型のまま取り込む輸送担体が存在し、それがSLC44A4遺伝子にコードされていることを紹介した。p459-461 野坂和人,江嵜啓祥 (共同研究につき本人担当分抽出不可能)	
10.トランスケトラーゼ 様タンパク質はトラ ンスケトラーゼ活性 を持たない(査読 付)	共	2013年11月	ピタミン 87(11)	(共同研究につき本人担当が抽出不可能) トランスケトラーゼ様タンパク質 (TKTL1) はがん細胞のエネルギー 代謝との関連が示唆されている。しかしながらTKTL1がトランスケト ラーゼ活性を持つという以前の報告を覆す論文 2 報について紹介し た。p629-631 野坂和人, 江嵜啓祥 (共同研究につき本人担当分抽出不可能)	
11. リボスイッチを標的 とする抗菌剤の開発 (査読付)	共	2012年11月	ビタミン 86(11)	ビタミンの代謝拮抗剤と考えられていた抗菌剤が実はリボスイッチに結合してビタミン生合成を抑制させていた例を紹介した。また、リボスイッチを標的とする阻害剤開発の可能性についても言及した。p647-649 野坂和人,江嵜啓祥 (共同研究につき本人担当分抽出不可能)	
12. ビタミンB1の代謝生 化学 -チアミン反応 性貧血症候群の病因 解析-	単	2011年11月	兵庫医科大学医学 会雑誌 36(1)	先天性代謝異常症であるチアミン反応性貧血症候群を紹介し、ヒトのチアミンピロホスホキナーゼとチアミン輸送タンパク質についての筆者のこれまでの研究内容を説明した。p19-22	
13. 酵母の転写因子Pdc2 によるチアミン依存	共	2011年10月	ビタミン 85(10)	出芽酵母の転写因子Pdc2についての論文を紹介し、Pdc2がチアミン 欠乏状態に応答してチアミン生合成遺伝子群の発現を誘導する機構	

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3. 総説		I		アンプログラング サイベ ハ 「ジャ 相一) よ 。 - 500 「40
性転写誘導機構 (査読付) 14. 出芽酵母の多機能酵素THI20が持つチアミナーゼII活性の生理的役割(査読付)	共	2008年07月	ビタミン 82(7)	について著者等の仮説を提示した。p538-546 野坂和人,江嵜啓祥,小野塚真理,今野博行,服部恭尚,赤路健一 (共同研究につき本人担当分抽出不可能) 出芽酵母の多機能酵素Thi20はHMPキナーゼ/HMP-Pキナーゼ/チアミナーゼⅡ活性を持つ多機能酵素である。このチアミナーゼⅡ活性の生理機能がチアミンのサルベージ合成であることを示唆するいくつかの論文を紹介した。p377-385 野坂和人,小野塚真理,川崎祐子
15.Recent Progress in Understanding Thiamin Biosynthesis and Its Genetic Regulation in Saccharomyces cerevisiae (査読	単	2006年08月	Appl Microbiol Biotechnol 72(1)	(共同研究につき本人担当分抽出不可能) 出芽酵母のチアミン生合成および取り込み機構に関する酵素群の性 質、並びにそれら酵素群の発現調節について近年の論文を中心に解 説した。また、発現調節因子群の改変による高チアミン産生酵母育 種の可能性について言及した。p377-385
16. チアミン反応性貧血 症候群の原因遺伝子 一高親和性チアミン 輸送タンパク質ー (査読付)	共	2001年01月	ビタミン 75(12)	チアミン反応性貧血症候群の原因酵素である高親和性チアミン輸送 タンパク質と、同じ遺伝子ファミリーに属している他の輸送タンパ ク質に関する知見について、最近の論文を中心に紹介した。p577- 579 野坂和人,小野塚真理 (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
17.Thiamin Transports in Yeast	共	1997年10月	Methods Enzymol 279	出芽酵母のチアミン輸送活性の測定法、色素試薬を用いた寒天培地上での検出法、化学修飾試薬標識による輸送タンパク質同定法、および輸送タンパク質遺伝子THI10のクローニング法などチアミン膜輸送研究で用いられた技法について紹介した。p109-117 Iwashima A, Nosaka K, Nishimura H, Enjo F
18. 酵母のチアミンリン酸代謝酵素系の分子遺伝学的研究(査読付)	単	1997年03月	ビタミン 71(3)	(共同研究につき本人担当分抽出不可能) 出芽酵母の外界に存在するチアミンリン酸エステルの細胞内利用に 関与する酵素遺伝子PHO3、補酵素チアミンピロリン酸生合成に関与 する遺伝子THI6、THI80のの構造と機能、ならびにこれら酵素遺伝子 の発現制御に関わる調節タンパク質THI2とTHI3の機能についてのこ れまでの研究成果を総括した。本論文は日本ビタミン学会第48回大 会における奨励賞受賞講演の内容に加筆してまとめたものである。 p109-120
19. 酵母におけるチアミ ン代謝系の調節 (査読付)	共	1994年10月	ビタミン 68(10)	出芽酵母のチアミン生合成酵素群とチアミン輸送活性の発現制御に関するこれまでの研究成果をまとめた。酵母のチアミン調節系では補酵素のチアミンピロリン酸がコリプレッサーとして機能することを紹介した。p551-564 西村洋、川崎祐子、野坂和人
20. 酵母のチアミン抑制 型酸性ホスファター ゼの性質と機能(査 読付)	共	1992年03月	ビタミン 66(3)	(共同研究につき本人担当分抽出不可能) 出芽酵母のチアミン抑制型酸性ホスファターゼPho3の生理的役割が チアミンリン酸エステルのチアミン部分の細胞内利用であることを 紹介した。さらに、膜のチアミン輸送活性もチアミンに抑制を受け ることから、酵母でのチアミンリン酸エステルの取り込みは細胞表 層と形質膜の2段階で制御されることを記した。p147-159 野坂和人、西村洋、岩島昭夫 (共同研究につき本人担当分抽出不可能)
4. 芸術(建築模型等含む)	・スポー	ソ分野の業績		2 1 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2
5.報告発表・翻訳・編集・	座談会・詩	対論・発表等		
6 研究集の取得性に				
6. 研究費の取得状況 1.科研費 基盤研究C	共	2018年から 2021年まで		細菌感染におけるFasシグナル依存的な新規ヘルパーT細胞の誘導と その役割の解析 研究分担者(代表者 内山良介)
2. 平成30年度武庫川女	単	2018年	武庫川女子大学	MIZUN IE石(IV双石 「3円以川)

研究業績等に関する事項						
が元来横寺に関する事項 世著・ 発行又は 発行所、発表雑誌等 ###						
著書、学術	 ド論文等の名称	共著書別		又は学会等の名称	概要	
6. 研究費(の取得状況	!			•	
子大学	科学研究費補					
助金学	内奨励金					
3. 科研費	基盤研究C	共	2015年から		ピロリ菌のビタミンBl取り込み機構解明と感染症補完療法への展開	
			2017年まで			
					代表者	
4. 科研費	基盤研究C	共	2009年から		Dアミノ酸を組み込んだ新しい概念に基づく持続性プロテアーゼ阻害	
			2011年まで		剤の開発	
					連携研究者(代表者 赤路健一)	
5. 科研費	基盤研究C	共	2006年から		異常アミノ酸含有海洋産天然物をシーズとするSARSウイルス増殖阻	
			2007年まで		害剤の開発	
					共同研究者(代表者 赤路健一)	
6. 科研費	基盤研究C	共	2006年から		酵母チアミン応答と代謝制御ネットワークの情報伝達機構解析	
			2007年まで		代表者	
7. 科研費	基盤研究C	共	2001年年か		ジーンターゲティングによるチアミン反応性貧血症候群の発症機構	
			ら2003年ま		解析	
			で		代表者	
8. 科研費	基盤研究B	共	1999年年か		トランスグルタミナーゼ異常症の分子病態に関する研究	
			ら2000年ま		共同研究者(代表者 山西清文)	
			で			
9. 科研費	基盤研究C	単	1999年年か		チアミン反応性貧血症候群におけるチアミンピロホスホキナーゼの	
			ら2000年ま		動態解析	
			で		代表者	
10.科研費	基盤研究C	共	1996年年か		チアミン反応性貧血症候群の原因酵素遺伝子の単離と変異部位の解	
			ら1997年ま		析	
			で		代表者	
11.日本ビ	タミン学会国	単	1995年		Characterization of Genes Encoding for Enzymes Involved in	
際学会	出席補助金				Thiamin Pyrophosphate Synthesis in Yeast. (2nd International	
					Congress on Vitamins and Biofactors in Life Science)	
				学会及び社会にお	おける活動等	
	年月日				事項	
1.2020年	1月~現在		Editor of J	Nutr Sci Vitaminol		
2.2018年	02月~現在		「ビタミン」	誌編集委員		
3.2013年	11月~現在		日本ビタミン	/学会代議員		
4.2013年	02月~現在		日本薬学会			
5.2012年	04月~現在		「ビタミン」誌トピックス担当委員			
6.2010年	4月~2023年3月		ビタミンB研	ミンB研究委員会委員		

日本小児科学会

日本生化学会 日本ビタミン学会

日本分子生物学会

京都府病院薬剤師会

酵母遺伝学集談会(現酵母遺伝学フォーラム)

7.1992年05月~2000年12月 8.1991年6月~2023年10月

9.1989年05月~2019年12月

10.1984年01月~現在

11.1983年01月~現在 12.1980年04月~1990年03月